

杉浦重剛著

國史初步

全三冊

明治十八年八月梓行

國史初步題言

漢書卷之九十四

曩友人平賀君有物理初步及化學初步
其為書簡易闡明頗適初學之徒今茲剛亦倣
其體摘國史之要編成此書以應兒童之求有
詔不足狗尾續之嘲固所不辭也

明治十八年八月

杉浦重剛誌

特31
829

杉浦重剛著

國史初步

全三冊

明治十八年八月梓行

國史初步題言

侯爵醍醐忠重啓



曩友人平賀君有物理初步及化學初步

其為書簡且闡明頗適初學之徒今茲剛亦倣

其類摘國史之要編成此書以應兒童之求有

詎不足狗尾續之嘲固所不辭也

明治十八年八月

杉浦重剛誌

特31
829

國史初步
題言

國史初歩上卷

杉浦重剛

第一代神武天皇八天照太神五世ノ孫鷓鴣草
 葺不合尊第四ノ皇子ナリ、年十五立テ太子トナ
 リ日向ノ高千穂ノ宮ニ在マス、初メ太神皇孫ニ
 三種ノ神器ヲ賜ヒ、以テ傳國ノ寶ト爲シ、傳ヘテ
 天皇ニ至ル、天皇東征ノ志アリ、皇族諸臣ト議シ、
 親ラ舟師ヲ率テ日向ヲ發シ、難波ニ至ル、遂ニ河
 内ヨリ進ンテ倭ニ入ラントス、土豪長髓彦ナル

モノアリ、饒速日命ヲ奉ジテ拒キ戰フ、皇師利アラズ、乃チ路ヲ轉シテ紀伊ヨリ倭ニ入り、兄猾ハ十梟帥、兄磯城ヲ誅ス、饒速日命、長髓彦ヲ殺シ來リ降ル、是ニ於テ倭盡ク定マル、乃チ都ヲ橿原ニ定メテ位ニ即ク、因リテ功ヲ論ジ賞ヲ行ヒ、地ヲ諸功臣ニ賜フ、○天皇、在位七十六年ニシテ崩ズ、天皇性明達、豁如、群雄ヲ蕩平シ、恩威并ニ行ハル、遂ニ能ク萬世ノ皇基ヲ開ク、宜ナルカナ神武ノ號、

第二代 綏靖天皇ハ神武天皇第三ノ皇子ナリ、

在位三十三年ニシテ崩ズ、

第三代 安寧天皇ハ綏靖天皇第一ノ皇子ナリ、
在位三十八年ニシテ崩ズ、

第四代 懿德天皇ハ安寧天皇第二ノ皇子ナリ、
在位三十四年ニシテ崩ズ、

第五代 孝昭天皇ハ懿德天皇第一ノ皇子ナリ、
在位八十三年ニシテ崩ズ、

第六代 孝安天皇ハ孝昭天皇第二ノ皇子ナリ、
在位百二年ニシテ崩ズ、

第七代 孝靈天皇ハ孝安天皇第一ノ皇子ナリ、

在位七十六年ニシテ崩ス、秦人徐福ノ歸化スル、蓋シ是時ニアリト云フ、

第八代 孝元天皇ハ孝靈天皇第一ノ皇子ナリ、在位五十七年ニシテ崩ズ、

第九代 開化天皇ハ孝元天皇第二ノ皇子ナリ、在位六年ニシテ崩ズ、

第十代 崇神天皇ハ開化天皇第二ノ皇子ナリ、○六年、神器ヲ大和ノ笠縫ニ移ス、是ヨリ先キ列朝皆神器ヲ殿内ニ安シ、床ヲ同シクシテ起卧セリ、天皇之ヲ瀆サンコトヲ畏レテ此舉アリ、○十

年九月、始メテ四道將軍ヲ置キ、大彥命ヲ北陸ニ、武埴川別ヲ東海ニ、吉備津彥ヲ西海ニ、道主ヲ丹波ニ遣ハシ、並ニ兵ニ將トシテ、命ヲ奉セサルモノヲ征討セシム、○十七年十月、諸國ニ令シテ舟船ヲ造ラシム、○六十五年七月、任那始メテ入貢ス、之レヲ外交ノ始ト爲ス、○六十八年、天皇崩ス、天皇深ク心ヲ政事ニ留メ、天下大ニ治ル、民稱シテ御肇國天皇ト云フ、

第十一代 垂仁天皇ハ崇神天皇第三ノ皇子ナリ、○三年三月、新羅王ノ子天日槍歸化ス、○五年

十月、皇后ノ兄狹穗彦、不軌ヲ謀リ、事露ハレテ誅セラル。皇后モ亦自殺ス。○二十五年三月、天照太神ノ廟ヲ伊勢ノ度會ニ遷シ、以テ天祖ヲ祀ル。○二十八年十一月、野見宿禰ノ請ニ從ヒ、殉死ヲ禁シ、土偶ヲ以テ之ニ代フ、宿禰嘗テ力士當麻蹶速トカヲ角シテ之レニ勝ツ、之ヲ相撲ノ始トス。○三十五年十月、諸國ニ令シテ池溝ヲ開キ、以テ農事ヲ勸ム。○九十九年天皇崩ズ。

第十二代 景行天皇ハ垂仁天皇第三ノ皇子ナリ。○十二年七月、筑紫ノ賊熊襲反ス、天皇之ヲ親

征シ、六年ニシテ平ク。○二十七年八月、熊襲又タ叛ス、乃チ皇子日本武尊ニ命シテ、之ヲ討セシム。尊時二年十六、勇武絶倫、女装シテ賊巢ニ入り、賊酋八十梟師ヲ刺殺ス、餘衆盡ク服ス。○四十年六月、蝦夷反ス、又日本武尊ヲシテ之ヲ征セシム。尊駿河ニ抵リ、賊ヲ撃テ之ニ克チ、遂ニ相模ヨリ上總ニ航シ、陸奥ニ入ル、賊悉ク降ル、乃チ上野信濃ヲ經テ美濃ニ出テ、伊吹山ニ抵リテ病ム、因リテ夷俘ヲ伊勢ノ太廟ニ獻シ、人ヲシテ京師ニ復命セシメ、遂ニ伊勢ニ薨ス、時年三十。○六十年、天皇

崩ズ、

第十三代 成務天皇ハ景行天皇第四ノ皇子ナリ、○三年正月、武内宿禰ヲ大臣ト爲ス、大臣ヲ置ク此ニ始マル、○五年、山河ノ形勢ニ因リ、國縣ヲ分割シ、國郡ニ造長ヲ置キ、縣邑ニ稻置ヲ置ク、○六十年、天皇崩ズ、

第十四代 仲哀天皇ハ日本武尊ノ第二子ナリ、○元年十月、大伴武以ヲ以テ大連ト爲シ、大臣ト共ニ朝政ヲ輔ケシム、大連ヲ置ク此ニ始ル、○八年、熊襲復反ス、天皇親ラ之ヲ征ス、皇后曰ク、先ツ

新羅ヲ征スレハ則チ熊襲自ラ服セント、天皇從ハス、直熊襲ト戰フテ利アラズ、○九年二月、天皇崩ズ、皇后乃チ大臣武内宿禰等ト謀リ、喪ヲ秘シ、進ンテ新羅ヲ征ス、新羅降附シ、高麗百濟モ亦風ヲ望ンテ降ル、皇后筑紫ニ凱旋シ、皇太子ヲ生ム、乃チ皇太子ヲ奉シテ仲哀ノ喪ヲ發シ、尋テ京師ニ歸ル、群臣皇后ヲ尊ンテ皇太后ト稱シ、朝ニ臨ミ政ヲ攝セシム、皇太后政ヲ攝スル、六十九年ニシテ崩ス、後諡シテ神功皇后ト云フ、后、雄武内亂ヲ定メ、外國ヲ服ス、又好ク曹魏司馬晋ニ通ス

ト云フ、

第十五代 應神天皇ハ仲哀天皇第四ノ皇子ナリ、○十六年二月、百濟王博士王仁ヲシテ入朝セシメ、論語及ヒ千字文ヲ獻ス、漢籍ノ至ル是ヲ始トス、皇太子稚郎子之ヲ師トシ學ブ、○二十八年九月、高麗ノ使者表ヲ上ル、皇太子其文ヲ見テ倭媢トナシ、之ヲ斥ク、○三十七年二月、使ヲ吳ニ遣リ、織縫ノ工女ヲ求ム、○四十一年、天皇崩ズ、皇太子皇兄大鷦鷯ト、位ヲ相讓リ決セス、太子遂ニ自殺ス、皇兄己ムヲ得スシテ位ニ即ク、

第十六代 仁德天皇ハ應神天皇第四ノ皇子ナリ、○十年十月、皇宮ヲ修理ス、初メ天皇高二登リ、人家ニ烟ノ起ル甚タ稀ナルヲ見テ、民ノ貧ナルヲ知り、乃チ自ラ節儉シテ悉ク租税ヲ除ク、三年ニシテ炊烟ノ盛ニ起ルヲ見ル、喜ンテ曰ク、是レ朕ノ富ナリト、臣民皇宮ヲ修メンコトヲ請フ、聽カス、是ニ至リテ始メテ修ム、○七十八年、大臣武内宿禰薨ス、宿禰五朝ニ歷事シ、政務ニ練達シテ輔翼スルコト少カラス、○天皇在位八十七年ニシテ崩ズ、

第十七代 履仲天皇ハ仁徳天皇第一ノ皇子ナリ、○四年八月、史官ヲ諸國ニ置キ、以テ四方ノ志ヲ達セシム、○天皇在位六年ニシテ崩ズ、

第十八代 反正天皇ハ履仲天皇ノ皇弟ナリ、○在位六年ニシテ崩ズ、

第十九代 允恭天皇ハ反正天皇第三ノ皇子ナリ、○四年八月、詔シテ姓氏ヲ一定セシム、○天皇在位四十二年ニシテ崩ズ、

第二十代 安康天皇ハ允恭天皇第三ノ皇子ナリ、○三年八月、眉輪王天皇ヲ弑ス、初メ天皇大草

香皇子ヲ殺シ、其妃ヲ入レテ皇后トナス、眉輪ハ大草香ノ子ニシテ、后ニ從テ宮ニ入り養ハル、モノナリ、是ニ至リテ此變アリ、

第廿一代 雄略天皇ハ允恭天皇第五ノ皇子ナリ、○六年三月諸國ニ詔シテ桑ヲ植シメ、后妃ニ敕シテ自ラ桑ヲ採リ以テ蠶事ヲ勸メシム、○二十年、高麗百濟ヲ滅シ王及王子ヲ殺ス、乃チ詔シテ百濟王ノ弟汶洲ヲ立テ、王トナス、○天皇在位二十三年ニシテ崩ズ、

第廿二代 清寧天皇ハ雄略天皇第三ノ皇子ナ

り、○三年四月、履仲天皇ノ皇孫億計王ヲ立テ、皇太子トナス、其弟弘計王ヲ皇子トス、○五年、天皇崩ズ、皇太子位ヲ弘計王ニ讓ル、王遺詔ヲ稱シテ從ハズ、太子ノ姑、飯豐青皇女政ヲ攝ス、皇女薨ス、ルニ及ンテ太子群臣ト固ク弘計王ニ請フテ位ニ即カシム、

第廿三代 顯宗天皇ハ履仲天皇ノ皇孫ニシテ市邊皇子ノ子ナリ、○在位三年ニシテ崩ズ、

第廿四代 仁賢天皇ハ顯宗天皇ノ皇兄ナリ、○在位十一年ニシテ崩ズ、

第廿五代 武烈天皇ハ仁賢天皇ノ皇子ナリ、天皇刑名ヲ好ミ、自ラ訟獄ヲ決シ、諸ノ慘刑自ラ臨視ス、天下之ヲ苦シム、○天皇在位八年ニシテ崩ズ、

第廿六代 繼體天皇ハ應神天皇五世ノ孫ニシテ彦主人ノ子ナリ、○十六年、梁ノ使司馬達來ル、○廿一年、近江ノ毛野ニ命シ新羅ヲ伐チテ、任那ノ故地ヲ復セシム、筑紫ノ國造磐井謀ヲ新羅ニ通シ、火豊ノ二國ニ據リ、以テ王師ヲ遏ム、即チ大連物部麤鹿火ヲ遣ハシ赴キ援ケシム、麤鹿火賊

日本書紀卷之六十一
一
ト戰ヒ大ニ之ヲ破リ磐井ヲ誅シ、因テ使ヲ新羅ニ遣ハス、新羅乃チ命ヲ奉ス。○二十四年二月、詔シテ廉節ノ士ヲ擧グ。○天皇在位二十五年ニシテ崩ズ。

第廿七代 安閑天皇ハ繼體天皇第一ノ皇子ナリ。○在位二年ニシテ崩ズ。

第廿八代 宣化天皇ハ安閑天皇ノ皇弟ナリ。○元年四月、諸國ニ詔シ屯倉ヲ修メ、凶荒ニ備ヘシム。○天皇在位四年ニシテ崩ズ。

第廿九代 欽明天皇ハ繼體天皇ノ皇子ナリ。○

元年八月、秦漢及諸蕃ノ歸化スルモノ、七千戸ヲ諸國ノ籍ニ編入セシム。○十三年十月、百濟佛像及ヒ經論ヲ獻ズ、大臣蘇我稻目奏請シテ之ヲ受ク、物部尾輿、中臣勝海爭フテ不可トス、天皇乃チ佛像ヲ稻目ニ賜フ、偶諸國大ニ疫ス、尾輿等奏請シテ、寺院ヲ燒キ佛像ヲ水ニ投ス。○十四年六月、百濟醫ト曆算ノ博士ヲ貢ス。○天皇在位三十二年ニシテ崩ズ。

第三十代 敏達天皇ハ欽明天皇第二ノ皇子ナリ。○元年四月、蘇我馬子ヲ以テ大臣トシ、大連

物部守屋ト朝政ヲ輔シム、馬子ハ稻目ノ子ニシテ守屋ハ尾輿ノ子ナリ、○十四年、是ヨリ先キ、馬子佛ヲ信シ、是ニ至テ大ニ寺塔ヲ建ツ、守屋等其妖法ヲ信シ、民ヲ惑ハスヲ劾奏シ、寺塔ヲ焼シコトヲ請フ、天皇馬子ニ詔シテ曰ク、汝獨リ之ヲ爲セ、他人ヲ惑ス勿レ、是歲天皇崩ズ、

第三十一代 用明天皇ハ欽明天皇第四ノ皇子ナリ、○二年四月、天皇病アリ、皇子厩戸及蘇我馬子佛ニ祈ランコトヲ請フ、守屋及ビ中臣勝海等固ク執テ不可トナス、是ニ至テ馬子ト守屋等ト

怨隙益深シ、馬子等人ヲシテ勝海ヲ殺サシム、是歲天皇崩ズ、馬子遂ニ守屋ヲ攻メ殺ス、

第三十二代 崇峻天皇ハ欽明天皇第十二ノ皇子ナリ、○五年十一月、馬子天皇ヲ弑ス、初メ馬子驕暴日ニ甚シ、天皇之ヲ疾ミ計ヲ厩戸ニ問フ、厩戸曰、陛下只忍ベト、馬子之ヲ聞キ、先ツ發シテ天皇ヲ弑ス、厩戸之ヲ哭シテ曰ク、是レ天皇過去ノ報ナリト、然レ厩戸遂ニ馬子ト絶タズ、

第三十三代 推古天皇ハ欽明天皇ノ皇女ナリ、○元年四月、厩戸皇子ヲ立テ、皇太子トナシ、政

ヲ攝セシム、太子四天王寺ヲ難波ニ建ツ、太子及蘇我馬子ニ詔シテ、諸蕃ノ僧ト佛教ヲ御前ニ講セシム、是ヨリ群臣争テ佛寺ヲ建ツ。○十年、百濟曆書天文地理等ノ書ヲ獻ス。○十二年、始テ曆日ヲ用ユ、冠位ヲ群臣ニ賜フ、冠ハ六品德仁禮信義智各大小アリ、總テ十二階トス、皇太子憲法十七條ヲ撰ブ。○十五年七月、大禮小野妹子ヲ遣ハシ、信ヲ隋ニ通ズ、明年隋ノ使來ル、乃チ又妹子ヲシテ留學生ヲ率テ、隋使ト共ニ往カシム。○十八年三月初テ紙墨及碾磑ヲ作ル。○二十八年十二月、

太子及馬子等ニ敕シテ、天皇記及國記等ヲ撰マシム。○二十九年、皇太子薨ス、謚メ聖德太子ト云フ、太子聰明博學ニシテ深ク佛法ニ通ズ、四天王法隆法興ノ諸寺ヲ建テ、大ニ佛法ヲ勸獎ス、佛法ノ大ニ我邦ニ行ハル、蓋シ是ニ基クト云フ。○

天皇在位三十六年ニシテ崩ズ、

第三十四代 舒明天皇ハ敏達天皇ノ皇孫ニシテ、押坂彥入大兄皇子ノ子ナリ。○在位十三年ニシテ崩ズ、

第三十五代 皇極天皇ハ敏達天皇ノ曾孫ニシ

テ舒明天皇ノ皇后ナリ。○四年六月、皇子中大兄、中臣鎌足ト計リ、大臣蘇我入鹿及ヒ其父蝦夷ヲ誅ス。初メ入鹿父子累世ノ餘威ニ籍リ、僭上極リ無ク、私ニ廢立ヲ謀ル。鎌足固ヨリ匡濟ノ志アリ、中大兄皇子ノ與ニ爲ス有ルニ足ルヲ知リ、共ニ謀ルトコロアラントス。一日蹴鞠ノ會ニ侍シ、皇子ノ靴脱スルニ際シ、跪テ之ヲ奉シ、因テ親近スルヲ得タリ。是ヨリ密ニ相謀リ事ヲ舉ケントス。偶々三韓ノ使者來聘ス、天皇使者ヲ延見シ、入鹿傍ニ侍ス、皇子直ニ進ンテ入鹿ヲ斬リ其罪状ヲ奏

シ、又人ヲ遣リテ蝦夷ヲ誅セシム。○天皇在位三年ニシテ位ヲ皇太弟ニ禪ル、

第三十六代 孝德天皇ハ皇極天皇ノ皇弟ナリ、

○元年、始メテ年號ヲ建テ、大化ト云フ。又大連ノ官ヲ廢シ、左右大臣及ヒ内臣ヲ置ク。是歲鐘匱ヲ闕ニ設ケ以テ冤枉ヲ訴ヘシム。又使ヲ諸國ニ遣テ貧弱ヲ兼弁スルノ弊ヲ改メシム。○二年正月、新令ヲ布キ、從來ノ國造縣首等ヲ罷メ、國郡二司ヲ置キ、又郡ニ大領小領ヲ置キ、戶籍、班田、租庸調ノ法ヲ定ム。蓋シ神武以來國造等漸ク世襲ト

ナリ、封建ノ形ヲナセシガ茲ニ到リテ全ク郡縣ノ制ニ改ム、我國勢ノ一大變ナリ、○五年二月、始メテ八省ヲ置キ、百官ヲ定メ、十九階ノ冠ヲ制ス、○白雉五年二月、高向玄理等ヲ以テ遣唐使トナス、是歲天皇崩ス、

第三十七代 齊明天皇ハ皇極天皇重祚ノ號ナリ、○四年四月、阿部比羅夫舟師ヲ率ヰテ蝦夷ヲ伐チ、淳代津輕ノ二郡領ヲ置キ、遂ニ進ンテ肅慎ヲ伐ツ、明年再ヒ蝦夷ヲ伐チ、後方羊蹄郡領ヲ定ム、○六年九月、新羅、唐ノ兵ヲ惜リ、百濟ヲ滅ス、百

濟援ヲ乞フ、天皇親ラ之ヲ援ハントシ、西州ニ幸ス、既ニシテ崩ス、

第三十八代 天智天皇ハ舒明天皇第一ノ皇子ナリ、天皇先帝ノ爲メニ喪ヲ服スル、六年ニシテ位ニ即ク、敕シテ冠位ヲ増シテ二十六階トス、○二年十月、大織冠内大臣藤原鎌足薨ズ、鎌足博學ニシテ器略アリ、天皇ヲ輔ケテ大難ヲ定メ、制度ヲ建ツ、屹トシテ一代ノ棟梁タリ、車駕其第二臨ミ疾ヲ問ヒ、姓ヲ藤原ト賜フ、是ニ至リテ薨ス、○四年正月、皇太子大友ヲ以テ太政大臣ト爲ス、

太政大臣此ニ始ル、是歲天皇崩ズ、○初ノ天皇疾篤シ、皇弟大海人ヲ召シテ後事ヲ屬ス、皇弟疾ト稱シテ之ヲ辭シ、出家シテ吉野ニ入ル、

第三十九代 弘文天皇ハ天智天皇第一ノ皇子ナリ、○元年六月、皇叔大海人兵ヲ吉野ニ舉ケ、東美濃ニ走リ、諸道ヲ扼ス、天皇兵ヲ發シテ之ヲ征シ、克タス、遂ニ近江長柄ノ山前ニ崩ズ、之ヲ壬申ノ亂ト云フ、

第四十代 天武天皇ハ天智天皇ノ皇弟ナリ、○九年、式九十二條ヲ制シ、親王以下庶人ニ至ル

マテノ服色ヲ定ム、○十三年、爵位ノ制ヲ定ム、諸王ハ十二階、庶人ハ四十八階トス、○天皇在位十五年ニシテ崩ズ、

第四十一代 持統天皇ハ天智天皇ノ皇女ニシテ、天武天皇ノ皇后ナリ、天武天皇崩スルニ及ンテ、政ヲ攝スル、四年、皇太子草壁薨ズルニ因テ、即位ス、○四年、諸國ノ民ヲ四分シ、其一ニ武事ヲ講ゼシム、又陣法博士ヲ諸國ニ遣ハシテ武ヲ講セシム、○天皇在位十年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第四十二代 文武天皇ハ草壁皇子ノ子ナリ、即位ノ三年、役小角ヲ伊豆ノ島ニ流ス。○四年六月、藤原不比等ニ敕シテ律令ヲ定メシム、初メ天智天皇、大臣ニ敕シテ唐律ニ倣ヒ新令ヲ撰マシム、天武ノ世ニ及ビ始テ成ル、之ヲ淡海令ト云フ、天皇ノ世ニ及ヒ更ニ之ヲ修正ス、大寶元年ニ至テ成ル、之ヲ大寶令ト云フ。○大寶元年二月、始メテ孔子ヲ釋奠シ、大學及ヒ國學ヲ設ク。○三月、官名位號服色ヲ改メ位記ヲ用テ位冠ニ代フ、親王ハ一品ヨリ四品ニ至ル、諸王群臣ハ一位ヨリ八位

ニ至ル、各正從アリ、第九位ヲ初位トナス。○大寶二年十月、新律ヲ頒ツ、是歲初テ岐蘇ノ山道ヲ開ク。○慶雲四年、天皇崩ズ、在位十一年、

第四十三代 元明天皇ハ天智天皇第四ノ皇女ナリ、草壁太子ニ配シ元正天皇及文武天皇ヲ生ム。○和銅元年、武藏國秩父郡ヨリ銅ヲ獻ズ、因テ元ヲ改ム、是歲銅錢和銅開珍ヲ製シ、銀錢ヲ廢ス。○五年正月、太安曆古事記ヲ上ル。○是歲陸奥ノ十二郡ヲ割テ出羽國ヲ置ク、明年、丹波ノ五郡ヲ割テ丹後ヲ置キ、備前ノ六郡ヲ割テ美作ヲ置キ、

日向ヲ割テ大隅ヲ置ク、是歲諸國ニ詔シテ風土
記ヲ作ラシム、○八年、天皇位ヲ皇女ニ禪ル、
第四十四代 元正天皇ハ元明天皇ノ皇女ニシ
テ、文武帝ノ皇姉ナリ、○靈龜二年四月河内ノ三
郡ヲ裂テ和泉ヲ置ク、是歲多治比縣守ヲ以テ遣
唐使トナシ唐ニ使ス、下道真備安倍仲磨僧玄昉
等從テ唐ニ留學ス、○養老二年、越前ノ四郡ヲ裂
テ能登ノ國ヲ置キ、陸奥六郡ヲ裂テ岩城ヲ置キ、
五郡ヲ裂テ岩代ヲ置ク、○三年、始テ按察使ヲ置
キ諸道ヲ巡視セシム、是歲民ヲシテ祗ヲ右ニセ

シム、○四年、曩ニ舍人親王ニ勅シテ日本書記ヲ
撰マシム、是ニ至テ成ル、是歲右大臣藤原不比等
薨ズ、不比等ハ鎌足ノ子ナリ、四子アリ、武智ヲ南
家ト稱シ、房前ヲ北家、宇合ハ式家、磨ハ京家ト稱
ス、後ノ藤原氏皆此四家ヨリ出ツ、○八年、天皇位
ヲ皇太子ニ禪ル、

第四十五代 聖武天皇ハ文武天皇第一ノ皇子
ナリ、○神龜元年三月、蝦夷反ス、藤原宇合往キテ
之ヲ平グ、是歲初メテ多賀城ヲ築キ以テ蝦夷ニ
備フ、○五年正月、渤海初メテ使ヲ遣リテ來聘セ

シム、○天平七年三月、遣唐使歸ル下道真備、僧玄
昉等モ亦皆至ル、詔シテ玄昉ヲ僧正トナシ、真備
ヲ中宮亮トナス、○十二年九月、大宰小貳藤原廣
嗣上書シテ僧玄昉、下道真備ヲ誅スルヲ請フ、
初メ玄昉說法ト稱シ、屢宮中ニ出入シテ皇后ニ
寵アリ、真備之ヲ知テ敢テ言ハズ、玄昉亦廣嗣ノ
妻ヲ姦セントス、是ニ至テ廣嗣上表シテ時政ノ
失ヲ言ヒ、并セテ玄昉真備ノ姦ヲ彈劾ス、報セズ、
遂ニ兵ヲ擧グ、乃チ大野東人等ヲ遣ハシ討テ
之ヲ平ゲシム、○十五年十月、敕シテ金銅盧舍那

佛ノ大像ヲ作ラシム、天平感寶元年ニ至リテ
成ル、○天平感寶元年、陸奥國初メテ黄金ヲ獻ス、
是歲、天皇位ヲ皇太子ニ禪リ、薙髮シテ誠ヲ受ク、
天皇ノ出家スル比ニ始マル、

第四十六代 孝謙天皇ハ聖武天皇ノ皇女ナリ、
○天平勝寶元年、紫微中臺ヲ置キ藤原仲磨ヲ以
テ紫微令トナス、仲磨容姿美ナルヲ以テ寵ヲ受
ケ權ヲ專ラニス、橘奈良磨等其專横ヲ憤リ之ヲ
除キ併セテ廢立ヲ謀ル、事漏レテ誅セララル、○天
皇在位十年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第四十七代 淳仁天皇ハ天武天皇ノ皇孫舍人親王ノ子ナリ。○天平寶字二年八月、藤原仲磨ヲ太保トナシ、姓名ヲ賜テ惠美押勝ト云フ、是歲詔シテ國司ノ交替ノ期限ヲ六年トナシ、三年毎ニ巡察使ヲ遣リテ治績ヲ檢察セシム。○七年、是歲道鏡ヲ以テ少僧都トナス、道鏡說法ヲ以テ孝謙上皇ニ近侍シ、寵ヲ受ク、天皇屢々之ヲ諫ム、上皇喜ハズ。○八年九月、押勝道鏡ノ爲ニ寵ヲ奪ハレ、シテコトヲ懼レ、奏シ請テ近畿諸國ノ兵事都督トナリ、近江ニ據ル、上皇、藤原倉下磨ヲシテ之ヲ討

セシム、押勝敗死ス、上皇遂ニ天皇ヲ廢シ淡路ニ移シ自ラ重祚ス。○天皇在位八年ニシテ崩ズ、第四十八代 稱徳天皇ハ孝謙天皇重祚ノ號ナリ。○天平神護元年十月、道鏡ヲ以テ太政大臣禪師トナス。○二年十月、道鏡ニ法王ノ位ヲ授ケ、服色供御ニ擬ス、專横益甚シ。○神護景雲三年、是ヨリ先キ、太宰廟祝道鏡ノ旨ヲ希ヒ、宇佐八幡ノ神語ト稱シ、道鏡ヲシテ位ニ即カシメ、天下大平ナランコトヲ奏ス、是ニ於テ、天皇和氣清磨ヲ宇佐ニ遣ハシテ神教ヲ請ハシム、發スルニ及ンデ

道鏡清磨ヲ召見シ詳ニ禍福ヲ示ス清磨路ニシテ其友真人豐永ニ遇フ豐永ノ曰君ノ此行國家命脈ノ係ル處夫レ之ヲ勉メヨ道鏡ニシテ位ニ即カハ我將ニ伯夷ニ從フテ遊グベキノミ清磨深ク之ヲ然リトシテ曰ク我死生之ニ從ハント乃チ歸リテ神語ヲ奏シテ曰我國開闢以來君臣ノ分既ニ定ル敢テ非望ヲ企ルモノハ速ニ誅戮ヲ加ヘヨト道鏡大ニ怒リ清磨ノ官位ヲ褫ヒ大隅ニ流ス○四年天皇崩ス右大辨藤原百川等天智天皇ノ皇孫白壁ヲ立ント欲ス吉備真備等頗

ル異議アリ百川等遺詔ヲ矯メテ王ヲ立ツ之ヲ光仁天皇トナス道鏡ヲ下野ニ流シ清磨ノ官爵ヲ復ス

第四九代 光仁天皇ハ天智天皇ノ皇孫ニシテ施基皇子ノ子ナリ○寶龜元年安倍仲磨唐ニ卒ス當時才學ノ士唐ニ留學スルモノ多シ而シテ仲磨及ヒ吉備真備最モ顯ル○十年七月參議中衛大將藤原百川薨ス百川迎立ノ功アリ天皇甚タ之ニ信任ス皇太子ノ廢セララルニ及ンテ百川山部親王ヲ立テンコトヲ請フ衆議決セズ百川

固ク請ヒ殿前ニ立ツテ四十余日、天皇其誠悃ニ感ジ請フ所ヲ許ス、時人其忠誠ヲ稱ス、○天應元年、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、己ニシテ崩ズ、在位十二年、

第五十代

桓武天皇ハ光仁天皇第一ノ皇子ナリ、○延暦三年、使ヲ山背ニ遣シ都城ヲ經始ス、尋テ天皇親ラ之レヲ巡視ス、○四年七月、淡海三船卒ス、三船大學頭トナリ、神武天皇以來歷代ノ謚號ヲ定ム、○七年、僧最澄奏請シテ、根本中堂ヲ近江ノ比叡山ニ建テ延暦寺ト號ス、最澄後ニ傳

教大師ト號ス、○十三年十一月、都ヲ新京ニ遷シ詔シテ曰ク、此地ノ形勝、山河襟帶、自然ニ城ヲ成ス、宜シク山背ヲ改メテ山城ト稱スベシ、時ニ士民モ亦夕謳歌シテ平安ト呼フ、因テ京師ヲ平安城ト云フ、○天皇在位二十五年ニシテ崩ズ、天皇ノ世ニ蝦夷數々叛ス、坂上田村麿等討テ之ヲ平ク、

第五十一代

平城天皇ハ桓武天皇ノ第一ノ皇子ナリ、在位四年ニシテ位ヲ皇太弟ニ禪ル、

第五十二代

○嵯峨天皇ハ平城天皇ノ皇弟ナリ

○弘仁元年九月、是ヨリ先キ上皇ノ尚侍藥子寵ヲ恃ミ、其兄藤原仲成ト謀リテ、上皇ニ復祚ヲ勸メ奉シテ東國ニ走ル、天皇田村麿ヲ遣リテ要路ヲ扼セシム、上皇ノ衆潰散シ、藥子自盡シ、仲成誅ニ伏ス、上皇宮ニ還リテ僧トナル、之ヲ弘仁ノ變ト云フ、○二年五月、坂上田村麿薨ス、田村麿將師ノ略アリ、數々邊陲ノ亂ヲ平定ス、○五年、萬多親王新撰姓氏録ヲ奏上ス、○是歲、諸國ニ令シテ茶ヲ植シム、○七年、僧空海、金剛峯寺ヲ紀伊ノ高野山ニ建ツ、空海後ニ弘法大師ト號ス、○天皇在位

十四年ニ位ヲ皇太弟ニ禪ル、天皇博學ニシテ文ヲ善クシ、最モ書ニ巧ミナリ、

第五十三代 淳和天皇ハ嵯峨天皇ノ皇弟ナリ、

○天長六年、良岑安世ノ奏請ニヨリ諸國ニ令シテ水車ヲ造リ灌溉ニ便ニス、○七年、新撰格式成ル、○八年、秘府略成ル、滋野貞主諸儒ト敕ヲ奉シテ撰フ所、古今ノ文章ヲ類集ス、凡ソ一千卷、○十年二月、令義解成ル、初メ藤原不比等敕ヲ奉シテ令ヲ作ル、以來多ク年所ヲ經テ學者ノ之ヲ説ク互ニ異同アリ、是ニ至テ天皇、清原夏野等ニ敕シテ

諸儒ト論辨シテ義解ヲ作ラシム、是歲天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、在位十一年、

第五十四代 仁明天皇ハ嵯峨天皇第二ノ皇子ナリ、○承和九年、伴健岑橘逸勢等皇太子恒貞ヲ奉シテ東國ニ走リ亂ヲ爲サントス、事覺ル、健岑等流竄セラレ、太子モ亦廢セラル、是ヲ承和ノ變ト云フ、○嘉祥三年、天皇崩ス、在位十八年、

第五十五代 文德天皇ハ仁明天皇第一ノ皇子ナリ、○天安元年、藤原良房ヲ以テ太政大臣ト爲ス、○二年、天皇崩ズ、在位八年、

第五十六代 清和天皇ハ文德天皇第四ノ皇子ナリ、歲初メテ九歲ニシテ位ニ即ク、外祖太政大臣良房政ヲ攝ス、外戚ノ政ヲ攝スル、此ニ始マル、○貞觀十一年、貞觀格成ル、○十八年、天皇位ヲ皇太子ニ禪リ薙髮ス、

第五十七代 陽成天皇ハ清和天皇第一ノ皇子ナリ、年甫メテ十歲ニシテ位ニ即ク、良房ノ子基經政ヲ攝ス、○元慶二年三月、出羽ノ夷倭叛ク、基經、藤原保則ノ謀ニ從ヒ、小野春風ヲ以テ鎮守府將軍トナシ、保則ヲ出羽權守トナシ、討テ之ヲ

平ゲシム、保則文武ノ材略アリ、屢々國守トナリ
テ治績多シ、是ニ至テ春風ニ勸メ共ニ邊陲ヲ安
ンス、○八年、太政大臣藤原基經、天皇ヲ廢ス、初メ
天皇嬉戲度ナク群小ヲ狎近ス、基經盡トク之ヲ
追フ、天皇悛メス、乃チ請テ位ヲ禪ラシム、

第五十八代 光孝天皇ハ仁明天皇ノ第三ノ皇
子ナリ、藤原基經迎ヘテ之ヲ立ツ、○天皇在位三
年ニシテ崩ズ、

第五十九代 宇多天皇ハ光孝天皇ノ第七ノ皇子
ナリ、詔テ政巨細トナク悉ク基經ニ關白セシム、

關白ノ號此ニ始マル、○天皇、畫工巨勢金岡ニ敕
シテ殷周以來ノ名臣ノ像ヲ紫宸殿ノ障子ニ圖
セシメ、之ヲ聖賢障子ト云フ、○寬平九年、天皇位
ヲ皇太子ニ禪リ、藤原時平、菅原道真ニ詔シテ機
務ヲ參決セシム、

第六十代 醍醐天皇ハ宇多天皇第一ノ皇子
ナリ、○昌泰二年、藤原時平ヲ以テ左大臣ト爲シ、
菅原道真ヲ右大臣ト爲シ、并ニ朝政ヲ執ラシム、
道真庶務ニ練達シ、天下望ヲ屬ス、天皇道真ヲシ
テ諸政ヲ關白セシムルヲ藤原基經ノ故事ノ如

クセントス、道真辭シテ受ケス、文章博士三善清
行道真ニ退避ヲ勸ム、道真從ハス。○延喜元年、右
大臣菅原道真ヲ貶シテ太宰權帥ト爲ス、初メ時
平、道真ノ德望ヲ嫉ミ、道真ニ關白ノ内意アルヲ
聞クニ及ヒテ、其黨與ト共ニ廢立ヲ謀ルト讒言
ス、故ニ此命アリ、後二年ニシテ薨ス、後道真ノ爲
メニ祠ヲ建テ號シテ天滿天神ト云ヒ、以テ文學
ノ神トナス。○延喜五年、紀友則、紀貫之等古今和
歌集ヲ撰ミテ之ヲ奉ル。○七年、延喜格成ル。○十
四年二月、式部大輔三善清行意見封事十二條ヲ

奉リテ詳ニ時弊ヲ陳ス。○天皇在位三十三年、位
ヲ皇太子ニ禪ル、天皇心ヲ政事ニ留メ、勵精治ヲ
圖リ、人民安堵ス、嘗テ寒夜ニ御衣ヲ脱シ、凍餒ノ
苦ヲ試ム、故ニ後世治ヲ言ヘハ必ス延喜ヲ稱ス。
第六十一代 朱雀天皇ハ醍醐天皇第十一ノ皇
子ナリ。○天慶二年十一月、平將門、其伯父常陸大
掾國香ヲ殺シ、東國ヲ略ス、遂ニ都ヲ下總ノ猿島
ニ建テ百官ヲ擬置シ、自ラ平親王ト稱ス、諸國無
賴ノ徒争テ之ニ應ス、初メ將門藤原純友ト友ト
シ善シ、曾テ之ニ謂テ曰ク、吾ハ王族當ニ天子ト

ナルベシ、君ハ藤原氏宜ク我カ關白ト爲ルベシ、
將門ノ叛スルニ及ンテ、純友伊豫掾トナリ、海島
ニ據テ遙ニ將門ニ應ズ、是ニ於テ天下騷然タリ、
○三年二月、參議藤原忠文ヲ以テ征討大將軍ト
爲シ以テ將門ヲ討セシム、未タ至ラズ、常陸掾平
貞盛、藤原秀郷等ト將門ヲ襲フテ之ヲ殺ス、明年
小野好古源經基等モ亦純友ヲ討テ之ヲ平ク、世
之ヲ天慶ノ亂ト云フ、○天皇在位十七年ニシテ
位ヲ皇太弟ニ禪ル、

第六十二代 村上天皇ハ醍醐天皇第十四ノ皇

子ナリ、○天德四年、天皇清涼殿ニ御シ初メテ歌
合ノ會ヲ爲ス、○天皇性寛恕ニシテ恩偏私ナシ、
最モ心ヲ政事ニ留メ、窮民ヲ賑恤ス、世其政ヲ延
喜ニ比シ天曆ノ政ト云フ、天曆ハ天皇在位ノ年
號ナリ、○天皇在位二十一年ニシテ崩ズ、
第六十三代 冷泉天皇ハ村上天皇第二ノ皇子
ナリ、○安和二年三月、中務少輔橘繁延爲平親王
ヲ奉シテ亂ヲ爲サントス、事泄レテ誅セラル、京
師騷然、コレヲ安和ノ變ト云フ、○天皇在位二年
ニシテ位ヲ皇太弟ニ禪ル、

第六十四代 圓融天皇ハ村上天皇第五ノ皇子ナリ、○在位十五年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、第六十五代 花山天皇ハ冷泉天皇第一ノ皇子ナリ、○寛和二年六月初メ天皇心ヲ政事ニ委ネ網紀稍張ル、女御祇子卒スルニ及ンテ悲哀ニ堪ヘズ、右大臣藤原兼家其子道兼ヲメ天皇ニ勸メ、花山ノ元慶寺ニ入テ髮ヲ削ラシム、○天皇在位僅ニ二年、

第六十六代 一條天皇ハ圓融天皇第一ノ皇子ナリ、○長徳元年、藤原道長ニ勅シテ太政官ノ文

書ヲ内覽セシム、道長ハ兼家ノ子、豪爽ニシテ才氣アリ、權ヲ專ニシテ奢ヲ極ム、天皇心ニ之ヲ疾ムト雖、氏制スル一能ハス、○在位二十五年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第六十七代 三條天皇ハ冷泉天皇第二ノ皇子ナリ、道長政ヲ執ル一故ノ如ク、益々專横ナリ、○天皇在位五年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、第六十八代 後一條天皇ハ一條天皇第二ノ皇子ナリ、○萬壽四年十二月、太政大臣藤原道長薨ス、道長朝ニ立ツ四十餘年、其三女、皇后トナリ、天

皇及ヒ皇太弟皆其女ノ出ナリ、驕奢比ナク、土木ヲ極メ、法成寺ヲ建ツ、因テ法成寺入道ト稱シ、又御堂關白ト云フ。○長元元年、六月、前上總介平忠常亂ヲ下總ニ作シ、頗ル官軍ヲ窘シム、源賴信討テ之ヲ平ク。○天皇在位二十年ニシテ崩ズ。

第六十九代 後朱雀天皇ハ後一條天皇ノ皇弟ナリ、在位九年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル。

第七十代 後冷泉天皇ハ後朱雀天皇第一ノ皇子ナリ。○天喜四年八月、陸奥ノ酋長安倍賴時亂ヲ作ス、鎮守府將軍陸奥守源賴義ニ敕シテ之

ヲ討セシム、賴義捕獲シテ之ヲ誅ス、其子貞任、勢頗ル猖獗ナリ、賴義乃チ出羽ノ酋長清原武則ト兵ヲ併セ、貞任ヲ擊テ之ヲ殺ス、之ヲ前九年ノ役ト云フ。○天皇在位二十三年ニシテ崩ズ。

第七十一代 後三條天皇ハ後朱雀天皇第二ノ皇子ナリ。○延久元年二月、是ヨリ先キ、藤原氏政ヲ專ニシ、朝憲漸ク弛ブ、天皇之ヲ憤リ、是ニ至リテ大ニ綱紀ヲ張リ、新置ノ莊園ヲ罷ム。○閏十月、記録所ヲ置キ、親カラ民間ノ訴訟ヲ聽斷シ、藤原氏ヲシテ屏息セシム、然レモ在位僅ニ四年ニ

シテ崩ス、天皇ノ世ニ名臣朝ニ滿ツ、大江匡房ノ如キ其巨擘タリ、匡房輔翼ノ功頗ル多シ、源義家モ亦タ就テ兵法ヲ問フト云フ、

第七十二代 白河天皇ハ後三條天皇第一ノ皇子ナリ、天皇性果斷政ヲ親ラシ、藤原氏ノ權ヲ抑ヘ頗ル後三條ノ風アリ、○在位十四年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪リ、政ヲ院中ニ決ス、

第七十三代 堀河天皇ハ白河天皇第二ノ皇子ナリ、○寛治元年十二月初メ出羽酋長清原武衡等亂ヲ作ス、陸奥守源義家力戰シ是ニ至リテ之

ヲ平ラク、之ヲ後三年ノ役ト云フ、○天皇在位二十一年ニシテ崩ズ、天皇ノ世ヲ卒ルマテ白河法皇萬機ヲ決ス、

第七十四代 鳥羽天皇ハ堀河天皇第一ノ皇子ナリ、○在位十七年、法皇天皇ヲシテ皇太子ニ位ヲ禪ラシム、天皇嬖幸多ク最モ藤原得子美福門院ヲ寵ス後遂ニ保元ノ亂ヲ養成ス、

第七十五代 崇徳天皇ハ鳥羽天皇第一ノ皇子ナリ、○大治五年、白河法皇政ヲ聽ク、四十餘年、是ニ至テ鳥羽上皇政ヲ院中ニ聽ク、○保延三年

上皇ノ北面ノ士佐藤憲清官ヲ辭シテ去リ、髮ヲ削リ西行ト云フ、西行博ク兵書ニ通シ、和歌ヲ好クス、其遁世スル蓋シ悟ルトコロアリト云フ、同時ニ藤原爲業兄弟亦タ僧トナル、爲業大鏡ノ著アリ、○永治元年、上皇薙髮シテ法皇ト稱ス、尋テ天皇ニ勸メテ位ヲ皇太弟ニ禪ラシム、皇太弟ハ法皇ノ寵姫得子ノ生ムトコロナリ、是ヨリ兩宮相協ハス、天皇在位十九年、第七十六代 近衛天皇ハ鳥羽天皇第八ノ皇子ナリ、○天皇在位十五年ニシテ崩ズ、崇徳上皇重

祚ノ意アリ、若シ重祚スルヲ得サレハ其子重仁ヲ立テント欲ス、得子以爲ク上皇、近衛天皇ヲ呪詛スト、法皇ニ勸メテ上皇ノ同母弟雅仁ヲ立テシム、時ニ左大臣藤原賴長、法皇ニ寵アリ、兄攝政忠通ト相軋ル、上皇賴長ヲ延テ援ケシム、第七十七代 後白河天皇ハ崇徳天皇ノ皇弟ナリ、○保元元年七月、鳥羽法皇崩ズ、上皇乃チ賴長ト謀リ、前檢非違使源爲義ヲ召シ、白河殿ニ據リ、重祚セントス、天皇爲義ノ長子下野守源義朝及ヒ安藝守平清盛等ニ敕シテ之ヲ討セシム、義朝

戰略アリ、白河殿ヲ襲テ大ニ之ヲ破ル、賴長戰死シ、其黨潛匿シテ出テス、天皇少納言藤原通憲ノ策ヲ用斗之ヲ招降シ、皆之ヲ刑ニ處ス、遂ニ上皇ヲ讚岐ニ遷ス、之ヲ保元ノ亂ト云フ、○天皇在位四年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、天皇通憲ヲ信用シ、政事ヲ與リ聞カシム、通憲髮ヲ削テ信西ト稱ス才略アリ、政事釐革スルトコロ多シ、第七十八代 二條天皇ハ後白河天皇第一ノ皇子ナリ、○平治元年十二月權中納言藤原信賴左馬頭源義朝反ス、初メ信賴上皇ニ寵アリ、近衛大

將タラン、一ヲ請フ、信西諫テ之ヲ止ム、信賴之ヲ銜ム、時ニ太宰大貳平清盛、信西ト姻アリ、執位源義朝ノ上ニ出ツ、而メ義朝又夕信西ト隙アリ、是ニ於テ信賴、義朝ト謀リ上皇ヲ幽シ、天皇ヲ黑戶御所ニ遷シ、信西ヲ殺シ、自カラ大臣大將トナリ、官ヲ其黨與ニ授ク、獨藤原光賴屈セス、會議ニヨリテ信賴ヲ折ク、天皇私ニ清盛ノ第二幸シ、遂ニ清盛及ヒ其子重盛ニ敎シテ信賴、義朝ヲ討セシメ、事乃チ平ク、之ヲ平治ノ亂ト云フ、○天皇在位八年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第七十九代 六條天皇ハ二條天皇第二ノ皇子ナリ、後白河上皇政ヲ聽ク、○仁安二年二月内大臣平清盛ヲ以テ太政大臣トナス、初メ清盛保元平治ノ亂ヲ靖ンシタルノ功ヲ以テ、連リニ官爵ヲ進メ、是ニ至リ位遂ニ人臣ヲ極メ、其宗族朝廷ニ滿チ田園天下ニ半ハス、天下ノ權皆之ニ歸ス、○天皇在位四年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、時年僅ニ五歳未タ冠セザルノ上皇ハ未タ曾テアラサルトコロナリ、

第八十代 高倉天皇ハ後白河天皇第五ノ皇

子ナリ、○治承元年六月、清盛權大納言藤原成親ヲ流ス、初メ成親黨ヲ聚メ平氏ヲ滅サントシテ謀ル、後白河法皇モ亦其議ニ與カル、已ニシテ事泄ル、清盛成親ヲ流シ、遂ニ法皇ヲ幽セントス、重盛泣テ諫ム乃チ止ム、○三年七月内大臣平重盛薨ズ、重盛人トナリ沈重大度最モ衆心ヲ得タリ、清盛頗ル之ヲ憚ル、其薨スルニ及ンテ朝野嘆惜ス、是ヨリ清盛益驕暴ヲ極メ、遂ニ法皇ヲ幽ス、○天皇在位十三年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第八十一代 安徳天皇ハ高倉天皇第一ノ皇子

ナリ、天皇年甫メテ二歲、清盛政ヲ執ル。○治承四年五月、前兵庫頭源賴政、皇伯以仁王ニ勸メテ諸國ノ源氏ニ令シ兵ヲ擧ゲテ平氏ヲ討セシム、事泄ル、乃チ先ツ王ヲ奉シテ兵ヲ擧ケ平氏ト宇治川ニ戰ヒ、克タスシテ自殺ス、王モ亦タ薨ス。○八月、義朝第三子賴朝以仁王ノ令ヲ奉シテ兵ヲ伊豆ニ起シ、相摸ノ鎌倉ニ據ル。○九月、賴朝ノ從弟義仲モ亦兵ヲ信濃ニ起シ、平氏ト戰テ連リニ之ニ克ツ。○十月、清盛兵ヲ遣テ、賴朝ヲ討タシム、軍敗レテ歸ル。○養和元年、閏二月、前太政大臣平

清盛薨ズ、子宗盛嗣ク。○壽永二年、七月、義仲大擧シテ京師ニ入ル、法皇潛ニ其營ニ幸ス、宗盛天皇ヲ奉ジテ西國ニ奔ル、法皇乃チ遙ニ天皇ヲ廢シテ弟尊成ヲ立ツ、天皇在位四年。

國史初歩上卷終

國史初歩中卷



杉浦重剛



第八十二代 後鳥羽天皇ハ高倉天皇第四ノ皇子ナリ、○壽永二年九月、宗盛、安徳天皇ヲ奉シテ讃岐ノ屋島ニ徙ル、四國ノ將士之ニ歸スルモノ多シ、法皇義仲ヲシテ平氏ヲ討セシム、義仲遷延シテ發セス、京師ヲ抄略シ、驕暴ヲ極ム、法皇之ヲ厭ヒ、竊ニ賴朝ヲ召ス、義仲遂ニ天皇及ヒ法皇ヲ幽シ、逼テ賴朝ヲ討スルノ宣旨ヲ請フ、○元暦元

年正月、義仲征夷大將軍ト爲ル、賴朝其二弟範賴、義經ヲ遣テ之ヲ討タシム、義仲敗レ死ス、是時ニ當リ平氏還テ一ノ谷ニ據ル、範賴、義經攻テ之ヲ陷ル、宗盛、安德天皇ヲ奉シテ讚岐ノ屋島ニ走ル。○十月、賴朝公文所ヲ置キ、大江廣元ヲ別當トナシ以テ政務ヲ掌ラシメ、問注所ヲ置キ、三善康信ヲ以テ執事トナシ以テ訟獄ヲ斷セシム。○文治元年二月、義經屋島ヲ襲フ、宗盛等航シテ九州ニ走ラントス、範賴ノ豐後ニ在ルヲ聞キ、還テ長門ノ壇浦ニ至ル、義經追フテ海上ニ戰ヒ、大ニ之ヲ破

ル、宗盛ノ母、安德天皇ヲ抱キテ海ニ投シ、天皇崩ズ、宗盛擒ニ就キ、其他ノ平族略盡ク、義經皇太后及ヒ鏡璽ヲ奉シテ京師ニ入ル。○五月、義經宗盛ヲ鎌倉ニ護送ス、賴朝讒ヲ信シ且ツ義經ノ功ヲ忌ミ、鎌倉ニ入ルヲ許サズ、義經已ムヲ得ズシテ京師ニ還ル、途ニ宗盛ヲ斬ル。○十月、義經法皇ニ逼リ、賴朝ヲ討スルノ宜旨ヲ請フ、法皇之ヲ許ス、賴朝之ヲ聞キ、兵ヲ發シテ西上ス、義經逃走シ、其黨與諸國ニ潛伏シ、頗ル其捕獲ニ困シム、大江廣元即チ賴朝ニ勸メ、諸國ニ守護ヲ置キ、莊園ニ地

頭ヲ置キ、所在之ヲ追捕セシム、賴朝大ニ悦ヒ北條時政ヲシテ之ヲ京師ニ奏請セシメ、敕許ヲ得テ自ラ總追捕使ト爲ル、是ヨリ天下ノ權盡ク鎌倉ニ歸ス、尋テ賴朝征夷大將軍ニ任セラレ、○文治五年閏四月、藤原泰衡義經ヲ殺ス、○天皇在位十五年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第八十三代 土御門天皇ハ後鳥羽天皇第一ノ皇子ナリ、○正治元年正月、征夷大將軍源賴朝薨ズ、賴朝深沈ニシテ度量アリ、事ヲ處スルニ輕舉セズ、遂ニ能ク海内ヲ平定ス、子賴家嗣ク、北條時政外

祖ヲ以テ政ヲ執ル、○建仁三年八月、賴家其舅比企能負ト時政ヲ除カン、一ヲ謀ル、事泄ル、時政乃チ能負ヲ誘殺シ、遂ニ賴家ヲ伊豆ニ幽シ、後チ人ヲシテ之ヲ殺サシム、乃チ朝廷ニ請フテ賴家ノ弟千幡ヲ立ツ名ヲ實朝ト賜フ、○元久二年閏七月、時政實朝ヲ廢シ、其女婿ヲ立テントス、事覺ハレ、伊豆ニ放タル、其子義時代リテ政ヲ執ル、○承元二年二月、敕シテ專修念佛宗ヲ禁シ、僧源空（然法）上（上）ヲ土佐ニ流ス、○天皇在位十二年ニシテ位ヲ皇太弟ニ禪ル、

第八十四代 順德天皇ハ土御門天皇ノ皇弟ナリ、○承久元年正月、是ヨリ先キ實朝右大臣ニ任セラル、因テ拜賀ノ禮ヲ鶴岡ノ祠ニ行フ、賴家ノ子公曉暗ニ乘シテ之ヲ刺ス、而シテ公曉モ亦夕尋テ殺サレ、源氏ノ正統是ニ於テ絶ス、○七月、義時奏請シテ藤原賴經ヲ鎌倉ノ主トナス、政子代リテ政ヲ執ル、時人之ヲ尼將軍ト云フ、○天皇在位十一年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、
第八十五代 仲恭天皇ハ順德天皇第一ノ皇子ナリ、○承久三年五月初メ、後鳥羽上皇鎌倉ノ專

權ヲ憤リ之ヲ圖ルノ志アリ、是ニ至リテ遂ニ義時ノ官爵ヲ削リ討伐ノ令ヲ下ス、義時將士ヲ集メテ防禦ノ策ヲ議ス、政子モ亦親ラ臨ミ諸將ヲシテ去就ヲ決セシム、諸將皆貳ナキヲ誓ヒ且ツ退守センコトヲ請フ、鎌倉ノ謀臣大江廣元、三善康信、直ニ西上シテ闕ヲ犯ス、ノ策ヲ建ツ、政子之ニ從ヒ、義時ノ子泰時ヲシテ西上セシム、官軍敗績ス、上皇乃チ罪ヲ謀臣ニ歸シ、義時ノ官位ヲ復ス、○七月、義時遂ニ天皇ヲ廢シ、後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ、順德上皇ヲ佐渡ニ、土御門上皇ヲ土佐ニ流

シ、高倉天皇ノ皇孫茂仁王ヲ立ツ、之ヲ承久ノ亂ト云フ、

第八十六代 後堀河天皇ハ高倉天皇ノ皇孫ニシテ守貞親王ノ子ナリ、○貞應元年、鎌倉ヨリ府ヲ六波羅ノ南北ニ置キ以テ京師ヲ鎮護セシム、之ヲ兩六波羅ト云フ、○元仁元年六月、北條義時卒ス、子泰時代テ執權トナル、○嘉祿元年七月、政子薨ス、是歲大江廣元卒ス、廣元頗ル文史ニ涉リ、籌略アリ、賴朝ノ霸業ヲ成ス、率子廣元ノ計畫ニ出ツ、○貞永元年八月、北條泰時式目五十條ヲ定

メ以テ聽獄ノ資トナス、之ヲ貞永式目ト云フ、○天皇在位十二年ニメ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第八十七代 四條天皇ハ後堀河天皇ノ皇子ナリ、○在位十一年ニシテ崩ズ、

第八十八代 後嵯峨天皇ハ土御門天皇第二ノ皇子ナリ、○仁治三年六月、北條泰時卒ス、泰時最モ心ヲ民事ニ盡ス、鎌倉ノ霸業是ニ至テ大成ス、泰時ノ孫經時代テ執權トナル、○寛元二年四月、經時賴經ヲ廢シ、其子賴嗣ヲ奏請シテ征夷大將軍トナス、○天皇在位四年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、

第八十九代 後深草天皇ハ後嵯峨天皇第二ノ皇子ナリ、即位ノ歲鎌倉ノ執權北條經時卒ス、弟時賴之ニ代ル、○寛治元年六月、三浦泰村北條氏ヲ滅スヲ謀リ、成ラズシテ自殺ス、○建長四年二月、時賴、賴嗣ヲ廢シ、後嵯峨天皇ノ皇子宗尊親王ヲ鎌倉ノ主トナス、○康元元年十一月、時賴疾アリ、剃髮シテ最明寺ニ老ス、子時宗猶幼ナリ、其族長時代テ執權トナル、○天皇在位十三年ニシテ位ヲ皇太弟ニ禪ル、

第九十代 龜山天皇ハ後嵯峨天皇第三ノ皇子ナリ、○弘長元年五月、僧日蓮ヲ佐渡ニ流ス、日蓮法華宗ヲ創メ、他宗ヲ排斥ス、時賴禪ヲ信ス、故ニ此ニ及フ、○二年、僧親鸞寂ス、親鸞ハ法然ノ徒弟ニシテ一向宗ノ開祖ナリ、○三年十一月、北條時賴卒ス、時賴心ヲ政事ニ用ヒ、頗ル泰時ノ風アリ、最明寺ニ老スルノ後、微服シテ諸國ヲ周遊シ、民ノ疾苦ヲ察ス、又曾テ青砥藤綱ヲ擢用ス、藤綱公平明察ニシテ善ク訟獄ヲ斷ス、○文永三年六月、北條時宗、征夷大將軍宗尊親王ヲ廢シ、其子惟康親王ヲ立ツ、○五年二月、元ノ使者來リテ書ヲ

呈ス朝廷之ヲ鎌倉ニ示ス北條時宗其書辭無禮ナルヲ以テ奏シテ答書ヲ止メ其使ヲ逐フ。○八年九月元ノ使者再ヒ來ル時宗復タ之ヲ逐フ。○天皇在位十五年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル。第九十一代 後宇多天皇ハ龜山天皇第一ノ皇子ナリ。○文永十一年十月元兵三萬來リテ對馬壹岐ヲ陷レ遂ニ太宰府ヲ犯ス府兵擊チテ之ヲ却ク。○建治元年四月元ノ使者復タ來リテ和ヲ講ス時宗之ヲ鎌倉ニ斬リ益々守備ヲ嚴ニシ北條實政ヲ以テ鎮西ノ探題トナス。○弘安二年六

月元ノ使者復タ來リテ和ヲ講ス時宗復タ之ヲ博多ニ斬ラシム。明年五月元大舉シテ來リ侵ス我兵拒戰フテ利アラズ龜山上皇深ク之ヲ憂ヘ石清水ニ祈リ身ヲ以テ國難ニ代ルヲ乞フ已ニシテ元ノ兵太宰府ヲ犯ス府兵擊テ之ヲ破ル元兵退テ海島ニ據ル會颶風大ニ起リ元ノ戰艦盡ク覆没ス我兵乘シテ之ヲ殲クス之ヲ弘安ノ役ト云フ。○七年北條時宗卒ス子貞時代テ執權トナル。○天皇在位十四年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル。

第九十二代 伏見天皇ハ後深草天皇第二ノ皇子ナリ、○正應二年十月貞時征夷大將軍惟康親王ヲ廢シテ之ヲ京師ニ還シ、後深草天皇ノ第三子久明親王ヲ迎ヘテ鎌倉ノ主トナス、○天皇在位十二年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、
 第九十三代 後伏見天皇ハ伏見天皇第一ノ皇子ナリ、在位四年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル、時ニ後深草龜山後宇多伏見ノ四上皇アリ、天皇ヲ併セテ五上皇ナリ、
 第九十四代 後二條天皇ハ後宇多天皇第一ノ

皇子ナリ、初メ伏見天皇貞時ニ諭シテ龜山天皇ノ子孫ヲシテ位ヲ嗣グヲ得ザラシム、後宇多上皇之ヲ聞キ、貞時ニ教シテ先帝ノ遺詔ニ違フヲ責ム、是ニ於テ貞時、後深草龜山ノ兩統更立ノ議ヲ建ツ、○徳治三年八月、天皇崩ズ、在位七年、是歲貞時、征夷大將軍久明親王ヲ廢シ、其子守邦ヲ立ツ、
 第九十五代 花園天皇ハ伏見天皇第一ノ皇子ナリ、○應長元年十月、北條貞時卒ス、貞時モ亦夕泰時時頼ノ風アリ、頗ル心ヲ民事ニ用フ、子高時

猶ホ幼ナルヲ以テ族基時等代テ事ヲ行フ。○天皇在位十一年ニシテ位ヲ皇太子ニ禪ル。第九十六代 後醍醐天皇ハ後宇多天皇第二ノ皇子ナリ。○元亨元年十二月是ヨリ先キ後宇多法皇政ヲ院中ニ聽ク是ニ至リテ政ヲ還ス天皇乃チ記録所ヲ置キ親カラテ訟獄ヲ斷シ又夕儒臣ト經史ヲ討論シ僧玄慧ヲ召シテ侍讀トナス。○正中元年九月天皇高時ノ政ヲ失フヲ時トスルマ、藤原資朝藤原俊基等ト謀リ武士ノ用フベキ者ヲ援キ務メテ其歡心ヲ買ヒ以テ北條氏ヲ圖ル。

高時之ヲ覺リ資朝俊基ヲ捕フ天皇乃チ誓書ヲ賜ヒ事漸ク解クヲ得タリ。○嘉曆元年七月天皇高時ニ諭シテ第三子護良親王ヲ立テ皇太子トナサントス親王英姿アリ天皇之ヲ殊愛ス高時詔ヲ奉セス乃チ親王ヲシテ髮ヲ削リテ尊雲ト號シ叡山ノ座主ニ補シ以テ僧徒ノ心ヲ結バシム其大塔ニ居ルヲ以テ大塔ノ宮ト云フ。○二年三月陸奥人安藤堯執北條氏ニ叛ク高時兵ヲ遣テ之ヲ擊チ克タス初メ高時淫酒ニ耽リ政ヲ家宰長崎高資ニ委ス高資私多ク堯執族某ト邑

ヲ争フニ及ンテ、高資兩カラ賂ヲ納レテ決セス、故ニ叛ス。○元徳二年四月、大判事中原章房ヲ殺ス、章房法律ニ明カニシテ事務ニ練達シ、天皇ノ親任スルトコロトナル、天皇北條氏ヲ滅スヲ謀ル、章房固ク諫ム、天皇謀ノ泄レントヲ懼レ入ヲシテ陰ニ之ヲ殺サシム。○元弘元年、高時天皇ノ北條氏ヲ圖ルノ志益固キヲ聞キ、兵ヲ遣ハシテ京師ニ入ラシム、護良親王之ヲ謀知シ、天皇ニ奏ス、天皇乃チ神器ヲ奉シ笠置山ニ幸ス、親王東兵ヲ辛崎ニ拒キ利アラヌ南都ニ奔ル、天皇天下ニ

詔シテ王事ニ勤メシム、又河内ノ入楠正成ノ名ヲ聞キ、之ヲ召シ委スルニ恢復ノ事ヲ以テス、正成感奮詔ヲ奉ス、正成忠誠ニシテ謀略アリ、中興ノ業其力實ニ多シ。○八月、高時京師ニ主ナキヲ以テ、量仁親王ヲ奉シテ位ニ即カシム、之ヲ光嚴天皇ト云フ。○十月、東兵笠置ヲ攻メ陥ル、天皇遁ル、藤原藤房從フ、途ニシテ東兵ノ爲ニ獲ラル、東兵乃チ天皇ヲ平等院ニ奉シ、神器ヲ新主ニ傳フルヲ請フ、天皇許サス、別ニ新器ヲ作り之ヲ授ク、初メ正成赤坂城ニ據ル、賊兵之ヲ攻メテ常ニ敗

ル乃チ持久ノ計ヲ爲ス、己ニシテ城中食竭久正
成城ニ火シ衆ヲ率ヒテ金剛山ニ入ル、東兵屢攻
メテ克タス、○二年三月、高時天皇ヲ隱岐ニ遷ス、
備前人兒島高德途ニ駕ヲ奪ハン、一ヲ謀テ成ラ
ス、既ニシテ正成赤坂ヲ復シ、護良親王モ亦夕兵
ヲ吉野ニ起ス、○三年閏二月、播磨人赤松則村、護
良親王ノ令ヲ奉シ兵ヲ舉ケテ正成ニ應ス、隱岐
護衛佐々木清高ノ族義綱私カニ天皇ヲ奉シ伯耆
ニ還ル、州人名和長年族ヲ舉ケテ天皇ヲ舟上山
ニ奉ス、○三月、源忠顯、高德、則村等進ンテ六波羅

ヲ攻ム、東將足利高氏モ亦夕歸順スルニ會ス、乃
チ京師ヲ復ス、金剛山ノ圍モ亦夕解ク、○五月、上
野ノ人新田義貞、護良親王ノ令ヲ奉シテ兵ヲ起
シ鎌倉ヲ拔ク、高時誅ニ伏ス、○六月、天皇京師
ニ還幸ス、護良親王ヲ拜シテ征夷大將軍トナス、
○八月、決斷所ヲ置キ軍功ヲ賞スルヲ議ス、失當
多クシテ將士快々タリ、足利高氏ニ御諱ノ一字
ヲ賜ヒ尊氏ト云フ、○十月、詔シテ參議源顯家ヲ
陸奥守兼鎮守府將軍トナシ、結城宗廣ト皇子義
良親王ヲ奉シテ東邊ヲ鎮セシメ、准大臣源親房

ヲシテ之ヲ輔ケシム、既ニシテ皇子成良親王ヲ
上野ノ太守ト爲シ、鎌倉ヲ鎮セシメ、尊氏ノ弟直
義ヲシテ之ヲ輔ケシム。○建武元年正月、始メテ
楮幣ヲ造ル。○十一月初メ、天皇内侍藤原廉子ヲ
嬖シ言フトコロ皆ナ聽カル、其所生恒良親王太
子タリ、然メ廉子護良親王ノ大功アリテ、太子ニ
不利ナランコトヲ恐レ、足利尊氏ト結納シテ遂
ニ護良親王ヲ天皇ニ讒ス、天皇之ヲ信シ護良親
王ヲ鎌倉ニ放チ、直義ヲシテ之ヲ監セシム。○是
歲詔シテ成良親王ヲ以テ征夷大將軍トナシ、關

東廂番ヲ置キ、足利氏ノ族ヲ以テ之ヲ掌ラシメ、
武者所ヲ置キ、新田氏ノ族ヲ以テ頭人トナス、乃
チ元功ヲ録ス、尊氏第一タリ、武藏常陸下總ノ守
護トナル、直義ハ遠江ノ守護、義貞ハ上野播磨ノ守
護、其子義顯ハ越後ノ守護、其弟義助ハ駿河ノ守
護、正成ハ攝津河内ノ守護、名和長年ハ因幡伯耆
ノ守護、赤松則村ハ播磨ノ守護トナル、尋テ則村
ノ職ヲ奪フ。○二年七月、北條高時ノ子時行亂ヲ
爲シ、鎌倉ヲ攻ム、直義人ヲシテ護良親王ヲ殺サ
シメ、成良親王ヲ奉シテ西ニ走ル。○八月、尊氏自

ラ請フテ兵ニ將トシ時行ヲ討テ之ヲ破ル遂ニ府
ヲ鎌倉ニ開キ自ラ征夷大將軍ト稱シ、義貞ヲ除カ
ントヲ請フ、義貞モ亦タ尊氏ノ罪狀ヲ陳ス、○十
一月、天皇詔シテ尊氏ノ官爵ヲ削リ、義貞ヲシテ
之ヲ討セシム、尊氏兵ヲ出シテ之ヲ箱根ニ拒ク、
義貞連戰之ヲ破ル、己ニシテ將士叛クモノ多シ、
乃チ詔メ義貞ヲ召還ス、赤松則村以下ノ諸將叛キ
テ尊氏ニ應ス、○延元元年正月、尊氏大舉シテ京
師ヲ犯ス、官軍利アラズ、天皇神器ヲ奉シテ叡山
ニ幸ス、會顯家義良親王ヲ奉シ陸奥ノ兵ヲ率テ

入テ援ク、義貞正成等ト尊氏ヲ討テ大ニ之ヲ破
ル、○二月、尊氏九州ニ走リ小貳氏ニ頼ル、詔シテ
義貞ヲシテ尊氏ヲ討セシム、義貞進ンテ赤松則
村ヲ白旗城ニ圍ム、則村拒守シテ下ラス、○五月、
尊氏大舉シテ東上ス、義貞乃チ白旗ノ圍ヲ解キ
之ヲ兵庫ニ拒ク、朝廷正成ヲシテ赴援セシム、正
成策ヲ陳ス、然レ任用キラレス、乃チ子正行ヲ河
内ニ遣歸シ直義ト大ニ淡川ニ戰ヒ之ニ死ス、官
軍敗レ還ル、天皇乃チ復タ叡山ニ幸ス、○六月、尊
氏進ンテ京師ニ入ル、源忠顯名和長年以下ノ諸

將多ク之ニ死ス、○八月、尊氏後伏見上皇ノ皇子豐仁親王ヲ奉シテ位ニ卽カシム、之ヲ光明天皇トナス、○十月、尊氏佯テ降ヲ請フ、天皇之ヲ許シ義貞ヲシテ皇太子及ヒ尊良親王ヲ奉シテ北國ヲ經略セシメ、自カラ京師ニ還幸ス、尊氏天皇ニ神器ヲ傳ヘンテ迫リ請フ、天皇乃チ偽器ヲ授ク、○十二月、天皇吉野ニ潛幸ス、楠正行和田正朝等來リ衛ル、是ヨリ吉野ヲ南朝ト云ヒ、京師ヲ北朝ト云フ、○二年三月、是ヨリ先キ義貞義助等皇太子ヲ奉シテ、越前ノ金峯城ニ據ル、幾クモ

ナクシテ城陥リ皇太子捕獲セララル、○三年正月、北畠顯家結城宗廣等ノ諸將ト西上シ官軍勢大ニ張ル、幾クモナク顯家北朝ノ將高師直ト戰テ敗死ス、○閏七月、新田義貞越前ノ藤島城ヲ攻ムルニ際シ矢ニ中テ死ス、是ニ於テ朝廷結城宗廣ノ議ヲ用ヒ、顯家ノ弟顯信ヲ以テ鎮守府將軍トナシ、義良親王ヲ奉シテ往テ陸奥ヲ鎮セシメ、親房宗廣ヲシテ從テ行カシム、海路颶風ニ遇ヒ四散ス、親王顯信ト篠島ニ至リ、親房常陸ニ至ル、宗廣阿濃津ニ至リテ病没ス、○四年三月、義良親王

吉野ニ還ル。○懷良親王ヲ以テ征西大將軍トナシ九州ヲ鎮セシム。是歲天皇崩ズ、在位廿一年、第九十七代。後村上天皇ハ後醍醐天皇第八ノ皇子ナリ。○興國元年三月、脇屋義助ヲ伊豫ニ遣リ西國ノ軍事ヲ總督セシム。官軍大ニ振フ幾クモナクシテ義助病テ卒ス。賊軍復振フ。○三年六月、親房常陸小田城ヲ保ツ。小田治久出テ、敵ニ降ル。親房乃チ走テ關城ヲ保チ救ヲ結城宗廣ノ子親朝ニ乞フ。親朝欸ヲ敵ニ通スルヲ以テ兵ヲ出ダサス。親房書ヲ遺テ責ムルニ大義ヲ以テ

ス、之ヲ關城書ト云フ。親朝遂ニ應ゼズ。親房守ル能ハズシテ吉野ニ還ル。○正平三年正月、高師直等兵八萬ニ將トシテ來テ行宮ヲ犯ス。楠正行弟正時ト出テ、之ヲ拒キ克タズシテ死ス。○是歲北朝ノ光明天皇位ヲ其從子興仁親王ニ禪ル。之ヲ崇光天皇ト爲ス。○四年、是ヨリ先キ北朝尊氏ヲ征夷大將軍ニ拜シ、直義ヲ副將軍トナス。之ヲ兩御所ト稱ス。高師直軍功最モ多キヲ以テ尊氏ノ信任スルトコロトナリ。威權頗ル盛ナリ。直義之ヲ惡ミ、之ヲ除カンコトヲ謀ル。師直之ヲ覺リ兵

數萬ヲ率テ尊氏ニ迫テ直義ヲ作クルヲ請フ、尊氏之ヲ慰諭シ其請ヲ聽ルシ、直義ヲシテ髮ヲ削テ屏居セシム、是ニ於テ其子義詮ヲ鎌倉ヨリ召シ還シ、直義ニ代テ政ヲ執ラシメ、次子基氏ヲシテ鎌倉ヲ鎮セシム、○五年、直義降ヲ請フ、朝議之ヲ許ルシ命シテ尊氏ヲ討セシム、畠山國清以下ノ諸將師直ヲ惡ムモノ皆直義ニ附シ來リ降ル、○六年二月、直義尊氏ト戰ヒ大ニ之ヲ破ル、尊氏乃チ和ヲ議ス師直窮蹙出テ降り途ニ殺サル、直義乃チ義詮ヲ廢シ自ラ政ヲ執ル、石堂桃井等ノ

諸將執ヲ負テ横恣ナリ、諸將之ヲ惡ミ相率テ國ニ歸ル、石堂桃井等モ亦直義ヲ奉シテ越前ニ奔ル、尊氏之ヲ追撃ス、直義敗レテ鎌倉ニ走ル、尊氏之ヲ追撃セント欲ス、然レトモ官軍ノ後ヲ襲ハンコトヲ恐レ佯リテ降ヲ請フ、朝廷モ亦佯ハリテ之ヲ許ルシ、詔シテ直義ヲ討セシム、尊氏乃チ自ラ兵ヲ率テ直義ヲ討チ之ヲ破ル、直義出テ降ル、遂ニ之ヲ藥殺ス、○十一月、足利義詮使ヲ遣シテ北朝ノ天皇ヲ廢シ車駕ヲ迎ヘンテヲ請フ、朝議之ヲ許ルス、○七年二月、車駕男山ニ至ル、楠

正儀以下ノ諸將皆會シ、急ニ兵ヲ進メテ京師ヲ
攻ム、義詮乃チ近江ニ走ル、官軍京師ニ入り北朝
ノ諸上皇ヲ行在ニ送ル、○是時ニ當リ新田義宗
等尊氏ト武藏ニ戦ヒ之ヲ破ル、既ニシテ尊氏兵
ヲ集メテ復來リ攻ム、義宗等敗績ス、○三月、義詮
復タ京師ニ入ル、官軍退テ男山ヲ保ツ、義詮來リ
攻ム、諸將力戦シ天皇僅ニ吉野ニ達スルヲ得タ
リ、○八月、義詮光嚴天皇ノ皇子彌仁親王ヲ立ツ、
之ヲ後光嚴天皇トナス、○九年四月、準大臣源親
房薨ス、親房博學冷間、數朝ニ歷事シ王事ニ勤勞

ス、屹トシテ南朝ノ元老タリ、著ストコロ神皇正
統記職原抄等ノ諸書アリ、○十二月、足利直冬山
名時氏以下ノ諸將北朝ヨリ來歸スル者京師ヲ
攻ム、尊氏義詮、後光嚴天皇ヲ奉シテ近江ニ走ル、
○十年二月、細川頼之南海ノ兵ヲ率キ入テ義詮
ヲ救フ、時氏等共ニ戦テ敗績ス、己ニシテ尊氏モ
亦京師ニ歸ル、直冬以下ノ諸將共ニ戦テ利アラ
ス乃チ引テ歸ル、○十三年四月、足利尊氏卒ス、尊
氏大度ニシテ權略アリ、士之レガ用ヲナスヲ樂ム、
子義詮嗣ク、○十四年八月、菊池武光、懷良親王ヲ

義詮少貳氏ト筑後川ニ戰テ大ニ之ヲ破ル、此時ニ當リ九州ノ諸國率テ皆北朝ニ屬ス、王事ニ勤ムル者ハ唯菊池氏ノミ。○十月、畠山國清等大舉シテ西上シ、義詮ト兵ヲ合セテ行在ヲ犯ス。○十五年正月、楠正儀天皇ニ請テ觀心寺ニ幸シ自ラ赤坂城ニ居ル、北兵來リ攻ム、官軍戰テ利アラズ、正儀乃チ天皇ヲ奉シ退テ金剛山ヲ保ツ。○十六年、細川清氏來リ降ル、乃チ正儀ニ命シ清氏ヲ助ケテ京師ヲ攻メシム、義詮北朝ノ主ヲ奉シテ近江ニ走ル、既ニシテ北朝ノ別將行在ヲ襲フ、官軍之

ヲ聞キ京師ヲ棄テ、還ル。○十七年、山名時氏地ヲ美作ニ略シ、其子師義等ヲシテ三備ヲ徇ヘシム、細川清氏四國ヲ徇フ、義詮細川賴之ヲシテ清氏ヲ圖ラシム、賴之謀ヲ設ケテ清氏ヲ斬ル、細川山名ノ二氏是ヨリ始メテ大ナリ。○十九年、時氏北朝ニ降り略スル所ノ地ヲ領スルヲ請フ、義詮之ヲ許ルス。○二十二年四月、關東ノ管領足利基氏卒ス、基氏人ヲ識ルノ鑒アリ、義詮ニ勸メ細川賴之ヲ舉グ。○十二月、足利義詮卒ス、子義滿嗣久義詮ノ遺命ニ依リ賴之ヲ舉テ管領トナス、賴之

心ヲ盡シテ補導シ、政事釐革スル所多シ。○天皇
在位二十九年ニシテ崩ズ、

第九十八代 長慶天皇ハ後村上天皇第一ノ皇
子ナリ。○二十四年正月、楠正儀叛テ北朝ニ降ル、
是歲明主朱元璋書ヲ征西府ニ致シ、我海賊明ノ
邊境ヲ侵掠スル者ヲ鎮センコトヲ請フ、菊池氏
其書辭無禮ナルヲ以テ之ヲ却ク。○建德二年二
月、北朝ノ主位ヲ太子ニ禪ル、之ヲ後圓融天皇ト
ナス、是歲細川賴之其子ヲシテ正儀ヲ助ケ入寇
セシム。○文中二年八月、天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル

在位五年、

第九十九代後龜山天皇ハ後村上天皇第二ノ皇
子ナリ。○天授五年、是ヨリ先キ義滿諸將ヲ役シ
大ニ室町ノ第ヲ經營ス、之ヲ花ノ御所ト云フ、驕
奢頗ル甚タシ、細川賴之諫ムレドモ聽カス、近臣
從テ之ヲ讒ス、義滿乃チ賴之ノ職ヲ罷メテ國ニ
就カシム、賴之命ヲ聽キ即日途ニ上リ領國讚岐
ニ赴ク、既ニシテ義滿其功ヲ思ヒ命シテ南海ヲ
總管セシム、茲ニ至リテ賴之伊豫ヲ略シ河野氏
ヲ破ル。○弘和元年、正儀歸順ス、初メ正儀ノ北朝

二降ル蓋シ深意アリ、細川賴之ト共ニ謀ル所アリト云フ、○二年四月、北朝ノ後圓融位ヲ太子ニ禪ル、之ヲ後小松天皇トナス、是歲山名氏清紀伊和泉ヲ略ス、官軍僅ニ吉野ヲ保ツ、○三年、義滿相國寺ヲ創シ諸國ノ守護ニ命シテ役ヲ助ケシム、○元中三年、義滿禪寺五山ノ班位ヲ定ム、○六年、義滿賴之ヲ召還シ其子賴元ヲ以テ執事トナス、○八年十二月、山名氏清義滿ニ叛ク、義滿自ラ討テ之ヲ破ル、○九年五月、義滿大内義弘等ヲ遣リ行在ヲ襲ハシム、官軍敗績ス、義滿乃チ使ヲシテ

和ヲ請ハシメテ曰ク、車駕京師ニ還リ神器ヲ授ケハ則チ兩統更立スルノ故事ノ如クセント、詔シテ之ヲ許シ、車駕行在ヲ發シテ京師ニ入り大覺寺ニ御ス、義滿來降ノ禮ヲ用ヒント欲ス、天皇許サズ、遂ニ父子ノ禮ヲ以テ神器ヲ後小松天皇ニ授ク、茲ニ至リテ兩朝始メテ合ス、天皇在位二十四年、

第百代 後小松天皇ハ後圓融天皇第一ノ皇子ナリ、○應永元年十二月、義滿將軍ノ職ヲ其子義持ニ讓リ太政大臣トナルヲ請フ、朝廷勉メテ

之ヲ許ス、明年義滿太政大臣ヲ辭シ、髮ヲ削テ道義ト云フ。○四年、道義別業ヲ北山ニ起シ、土木ヲ窮極ス、之ヲ金閣ト云フ。○六年十月、大内義弘亂ヲ爲ス、道義討テ之ヲ平ク、初メ今川貞世筑紫ヲ鎮シ、恩威并ヒ行ハル、義弘共ニ謀ル所アリ、貞世聽カズ、義弘乃チ貞世ノ叛心アルヲ訴フ、道義讒ヲ信シ、貞世ヲ罷メテ國ニ就カシメ、義弘ヲシテ代リテ筑紫ヲ鎮セシム、是ヨリ兵力日々ニ強シ、是時ニ當リ、鎌倉ノ管領足利滿兼驕奢頗ル甚クシ、道義使ヲ遣リテ之ヲ責ム、服セス、遂ニ異圖アリ、義弘陰カニ謀ヲ通シ、東西ヨリ京師ヲ夾ミ攻メントス、道義謀シテ之ヲ知り、先ツ滿兼ヲ討タントス、偶々和ヲ講スルモノアリ、事乃チ寢ム、義弘獨リ事ヲ舉ゲ、遂ニ敗ル、道義貞世ヲシテ再ヒ筑紫ヲ鎮セシメント欲ス、辭シテ行カズ、貞世髮ヲ削リテ了俊ト云フ、文武ノ才略アリ、○八年五月、道義使ヲ明ニ遣ハシ、好ヲ通ス、其書辭甚ク恭シ、明年明主使ヲシテ、道義ヲ封シ、日本國王ト爲サシム、道義之ヲ受ク、世以テ國體ヲ失フトナス、○十五年五月、前太政大臣足利道義薨ズ、朝廷太上

皇ノ號ヲ贈ル、義持辭シテ受ケズ。○十九年八月、
天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、在位二十九年、
第百一代 稱光天皇ハ後小松天皇第一ノ皇子
ナリ。○二十三年七月、鎌倉ノ管領足利持氏其執
事上杉氏憲ヲ罷メ上杉憲基ヲ以テ之ニ代ス、憲
基扇谷ニ居リ、氏憲ハ山内ニ居ル、之ヲ兩上杉ト
云フ、兩家更々執事トナル、氏憲持氏ノ弟持仲ヲ
奉シテ亂ヲ爲シ持氏ヲ攻ム。○二十四年、義持關
東ノ諸將ニ令シ持氏ヲ助ケテ鎌倉ヲ復セシメ、
持仲及ヒ氏憲ヲ誅ス。○三十年二月、義持將軍職

ヲ辭シ其子義量ヲ以テ之ヲ襲ハシメ、自ラ髮ヲ
削リテ道詮ト云フ。○三十二年、征夷大將軍足利
義量薨ズ、道詮乃チ再ヒ政ヲ執ル。○正長元年正
月、征夷大將軍足利道詮薨ズ、管領畠山滿家、義持
ノ弟僧義圓ヲ青蓮院ヨリ迎ヘテ之レヲ立ツ、名
ヲ義教ト改ム。○七月、天皇崩ズ、在位十六年、
第百二代 後花園天皇ハ北朝ノ崇光天皇ノ曾
孫ナリ、稱光天皇崩シテ後ナシ、後小松上皇議シ
テ天皇ヲ立テ而シテ親ラ政ヲ院中ニ聽ク。○永享
十一年二月、義教攻テ鎌倉ノ管領持氏ヲ殺ス、初

國史初編
メ道詮ノ薨ズル持氏將軍タラン一ヲ希フテ得
ズ、常ニ快々トシテ曰ク、吾何ソ還俗將軍ニ屈セ
ンヤト、其執事上杉憲實數々諫ムレドモ聽カズ、
持氏讒ヲ信シテ憲實ヲ誅セントス、憲實出テ、
上野ニ走リ之ヲ京師ニ訴フ、義教乃チ兵ヲ發シ
テ憲實ヲ助ケ持氏ヲ討テ之ヲ破ル、持氏窮蹙シ
テ自殺セント欲ス、憲實使ヲ遣ハシテ之ヲ止メ
且義教ニ請テ持氏ノ死ヲ宥ノントス、義教聽カ
ス、持氏ニ迫リテ自殺セシム、基氏鎌倉ノ管領ト
ナルヨリ茲ニ至ルマテ四世凡ソ九十年ニシテ

亡フ、義教憲實ヲ以テ管領トナサント欲ス、憲實
固辭シテ受ケス、髮ヲ削リテ長棟ト云フ、○嘉吉
元年六月、赤松滿祐、征夷大將軍足利義教ヲ殺ス、
初メ義教滿祐ノ族貞村ヲ寵シ、滿祐ノ邑ヲ割テ
之レニ與ヘントス、滿祐之レヲ憤リ遂ニ此舉ニ
及ヘリ、詔シテ義教ノ子義勝ヲ以テ征夷大將軍
トナス、乃チ諸將ヲ遣リテ滿祐ヲ討セシム、山名
持豐先ツ進ンテ滿祐ヲ誅シ、悉ク其地ヲ領ス、○
三年七月、征夷大將軍足利義勝薨ズ、其弟義政職
ヲ襲グ、○文安二年、關東ノ將士故足利持氏ノ季

子成氏ヲ立テ鎌倉ノ管領トナシ、上杉憲實ノ子
憲忠ヲ以テ執事トナサン、一ヲ請フ、義政之ヲ許
ス。○享德三年十二月、成氏憲忠ヲ殺シ古河ニ走
ル、成氏上杉氏ノ其父ヲ殺スヲ怨ミ茲ニ及ブ、憲
忠ノ家宰等其弟房顯ヲ立テ共ニ成氏ヲ攻ム、是
ヨリ關東大ニ亂ル。○是歲盜畠山持國ノ郎ヲ燒
ク、初メ持國ニ將軍ヲ擁立シ功ヲ賴ミ專横ナリ、
髮ヲ削リテ德本ト云フ、公卿將士皆之レニ諂ヒ
事フ、獨リ山名持豐細川勝元德本ト相比シテ降
ラズ、德本子ナシ姪政長ヲ養テ嗣トス、已ニシテ

義就ヲ生ム、即チ之ヲ立テ、嗣トナシ政長ヲ殺
サント欲ス、政長逃テ勝元ニ依ル、持豐モ亦勝元
ノ姻戚ナルヲ以テ共ニ政長ニ黨ス、茲ニ於テ畠
山氏ノ家臣皆往テ政長ニ從フ、義就モ亦兵ヲ聚
メテ政長ヲ攻ントス、政長乃チ德本ノ家ニ迫ル、
已ニシテ德本ノ家火起ル、德本逃テ族滿則ノ家
ニ入り、義就河内ニ走ル、幾許モナク德本入ヲシ
テ勝元ニ謝セシメ復政長ヲ立ツ、幕議畠山氏ノ
邸ヲ火スルハ勝元持豐ノ所爲ニ係ルトナス、勝
元自ラ安ンゼス罪ヲ其家臣ニ歸シ之ヲ斬ル、持

豐モ亦罪ヲ謝シ退テ但馬ニ居ル事乃チ釋ク、○
寛正二年十月、義政其弟政知ヲ遣リテ伊豆ノ堀
越ニ居ラシメ以テ關東ノ主トナス、之ヲ堀越御
所ト稱ス、然レトモ關東ノ將士多ク心ヲ成氏ニ
歸ス、○五年七月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、在位三
十六年、

第百三代 後土御門天皇ハ後花園天皇ノ皇子
ナリ、○文正元年、是ヨリ先キ義政其弟義視ヲ以
テ嗣トナシ、且曰ク吾若シ男ヲ生マハ僧トナシ
決シテ嗣ヲ廢セズト、是歲子義尚生ル、其母之ヲ

僧ト爲スヲ欲セス、然レトモ既ニ義視ノ約アリ、
又細川勝元ノ之ヲ助クルヲ憚リ、諸將ニ就テ能
ク勝元ト抗スヘキモノヲ求人、密カニ之ヲ山名
持豐ニ托ス、時ニ持豐髮ヲ削リテ宗全ト云フ、宗
全初ノ女ヲ以テ勝元ニ娶ス、子ナシ、勝元乃チ宗
全ノ子は豐ヲ養テ嗣トナス、既ニシテ子ヲ生ミ
是豐ヲ廢ス、是ヨリ稍ク隙アリ、故ニ宗全托ヲ受
ケテ辭セズ、畠山義就ノ勇勝元ト相抗スルニ足
ルヲ聞キ、之レニ結ハント欲シ、義政ニ請テ其舊
罪ヲ許シ京師ニ入ラシム、○應仁元年、宗全義就

以下ノ諸將ヲ率ヒ、幕府ニ到リ、政長ヲ罷メ、義就ヲ入ル、ヲ請フ、之ヲ許ス、乃チ使ヲシテ、勝元ヲ諭サシム、勝元遂ニ政長ト兵ヲ聚メテ自ラ備フ、宗全モ亦兵ヲ聚メテ幕府ヲ守ル、義政令シテ曰ク、政長義就手兵ヲ以テ決戦スベシ、諸將ヲシテ助クル、ナカラシメヨ、義就政長ヲ御靈林ニ伐ツ、宗全陰カニ義就ヲ助ク、政長敗走ス、世勝元ノ政長ヲ救ハサルヲ嘲リ、怯トナス、勝元之ヲ耻チ、宗全ノ兵散スルヲ窺ヒ、兵ヲ其所管ノ諸國ニ徴ス、政長以下ノ諸將皆屬ス、兵凡ソ十六萬、宗全之

ヲ聞キ、亦其所管ノ兵ヲ徴ス、義就以下ノ諸將之レニ屬シ、兵凡ソ十一萬、勝元ノ邸ハ幕府ノ東ニ在リ、宗全ノ邸ハ西ニ在リ、義視兩軍ノ間ニ往來シテ之ヲ和解ス、勝元先ツ進テ幕府ニ入り、義視ヲ迎フ、宗全怒テ之ヲ攻ム、勝タス、之ヨリ兩軍交戦シ、東軍常ニ利アリ、大内政弘周防長門ノ兵三萬ヲ率テ東上シ、宗全ヲ助ク、西軍勢復振フ、兩軍相國寺ヲ以テ界トナシ、互ニ持久ノ計ヲナス、○二年九月、流言アリ、勝元廢立ヲ謀ルト、義政疑懼ス、勝元乃チ義視ヲシテ出テ走ラシム、宗全迎ヘ

テ西軍ニ入ラシム、是ヨリ兩軍將軍兄弟ノ戰ノ如シ。○文明五年、宗全勝元相尋テ死ス、義政モ亦職ヲ辭シ其子義尚ヲシテ軍職ヲ繼カシム。○六年九月、義政書ヲ朝鮮ニ送り、明國勦合ノ印ヲ求メ明ノ貨寶珍玩ヲ購ハシム、是ヨリ先キ銀閣ヲ東山ニ經營シ以テ道義ノ金閣ニ擬シ茗宴ヲ以テ樂トナス、號シテ東山殿ト云フ。○九年、西軍悉ク解テ國ニ歸ル、應仁元年ヨリ茲ニ至ルマテ凡ソ十年、京師文武ノ邸宅皆兵燹ニ罹ル、之ヲ應仁ノ亂ト云フ。○十年、是ヨリ先キ上杉顯定管領足

利成氏ヲ古河城ニ攻メ之ヲ陷ル、茲ニ至リテ成氏古河城ヲ復ス、是時顯定上野ノ平井ニ居ル、上杉定正相摸ノ大場ニ居リ交々兵ヲ構フ、定正ノ將太田持資才略アリ、髮ヲ削リテ道灌ト云フ、川越江戸ノ二城ヲ築キ八州ノ將士多ク心ヲ歸ス、顯定恐テ反間ヲ放ツ、定正之ヲ信シ持資ヲ殺ス、茲ニ於テ將士復定正ニ叛ク。○延徳元年三月、征夷大將軍足利義尚薨ス、義政乃チ義視ヲ召還シ其子ヲ養テ嗣トナス、之ヲ義植ト云フ。○二年正月、前征夷大將軍足利義政薨ス、義植征夷大將軍

ト爲ル。○三年四月、足利政知其子茶々丸ノ殺ス所ト爲ル、北條長氏討テ茶々ヲ誅ス。○明應二年、管領畠山政長義植ヲ奉シ、畠山義豐ヲ討ツ。細川政元義豐ト謀ヲ合セ、政長ヲ殺シ、義植ヲ捕ヘ、政知ノ子義澄ヲ立ツ。既ニシテ義植走テ大内義興ニ依ル。○三年十二月、義澄征夷大將軍ニ任シ、細川政元管領タリ。○四年二月、北條長氏小田原ヲ襲テ之ヲ取ル。○九年九月、天皇崩ズ、在位三十六年。

第百四代 後栢原天皇ハ後土御門天皇ノ皇子

ナリ。○永正四年六月、細川政元ノ家宰香西元近政元ヲ殺シテ其子澄之ヲ立ツ。家宰三好長輝政元ノ子澄元ヲ奉シ、元近及ヒ澄之ヲ殺シ、將軍義澄ニ請テ澄元ヲ管領トナス。○五年三月、大内義興前將軍足利義植ヲ奉シ、細川高國ト大擧シテ京師ニ入ル。義澄近江ニ走ル。長輝澄元ト阿波ニ走ル。乃チ復タ義植ヲ以テ將軍トナシ、義興ヲ管領トナス。○十六年八月、北條長氏卒ス。長氏髮ヲ削リテ早雲ト稱ス。聰明ニシテ籌略アリ。伊豆ヨリ起リ相摸ヲ取ル。子氏綱ニ遺命シテ八州ヲ經

略セシム。○十七年二月、是ヨリ先キ管領大内義興西ニ歸リ、細川高國代テ管領トナル。三好元長、細川澄元ヲ擁シ、京師ニ入り、高國ヲ攻ム。高國敗レテ、近江ニ走ル。既ニシテ復タ京師ニ入り、攻メテ澄元々長ヲ走ラス。○大永元年三月、天皇即位ノ禮ヲ行ス。本願寺ノ僧資ヲ献ス。乃チ之ヲ賞シテ門跡ニ准ズ。○六月、細川高國將軍義植ヲ逐ヒ、義澄ノ子義晴ヲ立ツ。○四年正月、北條氏綱江戸城ヲ取ル。上杉氏退テ川越城ヲ保ツ。○六年四月、天皇崩ズ。在位二十六年。

第百五代 後奈良天皇ハ後栢原天皇ノ皇子ナリ。○大永七年、三好元長、細川晴元ヲ奉シ、京師ニ入ル。細川高國迎ヘ、戰テ敗績ス。乃チ援ヲ越前ノ朝倉氏ニ請フ。元長晴元ト共ニ高國ヲ攻ム。高國出テ走リ、將軍義晴モ亦近江ニ走ル。○享祿四年、高國兵ヲ率テ細川晴元ヲ攝津ニ攻ム。元長晴元ヲ奉シ、高國ト戰テ之ヲ殺ス。○天文二年、將軍義晴京師ニ還リ、細川晴元ヲ以テ管領ト爲ス。晴元其家宰三好元長ヲ殺ス。○五年五月、天皇即位ノ禮ヲ行フ。大内義隆其資ヲ献ス。○六年七月、北

條氏綱川越城ヲ陥ル、威遠近ニ振ス。○七年二月、武田晴信其父信虎ヲ逐テ甲斐ニ自立ス、晴信沈勇ニシテ權略アリ善ク兵ヲ用ユ。○十月、北條氏綱足利義明里見義弘ト下總ノ鴻臺ニ戰ヒ大ニ之ヲ破ル。○九年、出雲ノ尼子晴久毛利元就ヲ安藝ノ吉田城ニ攻ム、大内義隆之ヲ救ヒ晴久ヲ走ラス、元就ハ安藝ニ居リ、初メ尼子氏ニ屬シ己ニシテ叛キ大内氏ニ附ク。○十二年八月、葡萄牙人始メテ烏銃ヲ傳ヘ、又タ天主教ヲ傳フト云フ。○十五年四月、兩上杉氏兵ヲ合セテ川越城ヲ圍ム、

城將北條綱成固守シテ下ラス、氏康之ヲ助ケ大ニ上杉氏ノ兵ヲ破ル、是ヨリ八州ノ諸族北條氏ニ歸ス。○九月、細川晴元將軍義晴ニ迫リ職ヲ其子義輝ニ讓ラシム。○十六年、武田晴信村上義清ヲ信濃ニ攻メ之ヲ破ル、義清走テ越後、長尾景虎ニ依ル、景虎乃チ兵ヲ出シ晴信ト信濃ニ戰フ。○十八年、三好元長ノ子範長兵ヲ率テ京師ニ入ル、細川晴元前將軍義晴、將軍義輝ヲ狹テ近江ニ走ル、範長其臣松永久秀ヲシテ京師ヲ守ラシム、範長髮ヲ削テ長慶ト稱ス。○二十年七月、北條氏康

上杉憲政ヲ上野ノ平井城ニ攻テ之ヲ破ル、憲政走テ長尾景虎ニ依リ其姓氏職號ヲ授ク、景虎因テ上杉氏ヲ冒シ關東ノ管領ト稱ス、景虎慄悍ニシテ將畧アリ、善ク兵ヲ用ヒ武田晴信ト名ヲ齊ラス、○是歲大内義隆其臣陶晴賢ノ殺ストコロト爲ル、○二十一年、將軍義輝三好長慶ト和シ京師ニ還ル、晴元ノ管領ヲ罷メ細川氏綱ヲ以テ管領ト爲ス、長慶ノ請ヒニ從フナリ、○二十二年十一月、上杉景虎武田晴信ト大ニ川中島ニ戰ス、互ニ勝敗アリ、明年再ヒ大ニ戰ス、晴信傷テ退ク、晴

信髮ヲ削リテ信玄ト號シ、景虎モ亦夕謙信ト號ス、○弘治元年十一月、毛利元就陶晴賢ヲ嚴島ニ襲ヒ之ヲ殺ス、初メ大内義隆ノ死スル元就ニ遺托シテ晴賢ヲ討セシム故ニ此舉アリ、是ヨリ元就ノ名西陸ニ振フ、○二年三月、晴信景虎又大ニ川中島ニ戰フ、○三年、天皇崩ズ、在位三十一年、第百六代 正親町天皇ハ後奈良天皇第一ノ皇子ナリ、○永祿二年五月、上杉景虎京師ニ入朝ス、天皇之ニ酒及ヒ劍ヲ賜フ、又將軍義輝ニ謁ス、義輝其偏名ヲ賜ヒ輝虎ト改ム、○三年正月、天皇卽

位ノ禮ヲ行フ、毛利元就大内氏ノ故事ニ因リ其
 資ヲ獻ス、○五月、駿河ノ今川義元大舉シテ尾張
 ノ織田信長ヲ攻ム、信長逆ヘ撃テ大ニ之ヲ桶狭
 間ニ破リ義元ヲ殺ス、是ヨリ信長ノ名天下ニ振
 フ、○四年四月、上杉輝虎關東ノ諸將ヲ率ヒ大舉
 シテ小田原城ヲ圍ム、北條氏康固守シテ出テズ、
 已ニシテ諸將多ク叛ク、輝虎乃チ越後ニ歸ル、○
 九月、輝虎復晴信ト大ニ川中島ニ戰フ互ニ勝敗
 アリ、○五年十月、天皇使ヲ尾張ニ遣ハシ密旨ヲ
 織田信長ニ賜ヒ托スルニ撥亂反正ノ事ヲ以テ

ス、○八年五月、松永久秀將軍義輝ヲ殺シ義榮ヲ
 立ツ、義輝ノ弟僧覺慶近江ニ走リ名ヲ義昭ト改
 ム、○十一年、義昭織田信長ニ依ル、是ニ於テ信長
 義昭ヲ奉シテ京師ニ入ル、乃チ詔シテ義昭ヲ征
 夷大將軍ニ任ス、○十二年五月、織田信長其將木
 下秀吉ヲシテ京師ヲ衛護セシメ且皇居ヲ修治
 セシム、○元龜元年四月、織田信長朝倉義景ヲ越
 前ノ金崎城ニ攻ム、近江ノ淺井長政兵ヲ舉テ義
 景ニ應ス、信長乃チ引キ歸ル、既ニシテ信長義景
 長政ト大ニ近江ノ姊川ニ戰テ之ヲ破ル、是歲

毛利元就北條氏康相尋テ卒ス、○三年十二月、武田晴信遠江ヲ侵ス、遠江ハ徳川家康ノ領國タリ、家康援ヲ信長ニ請フ、信長兵ヲ遣テ之ヲ救フ、家康乃チ兵ヲ合セテ晴信ト三形原ニ戰テ敗績ス、晴信追テ濱松ノ城下ニ至ル、其伏アルヲ疑ヒ兵ヲ引テ歸ル、○天正元年正月、將軍義昭兵ヲ擧テ織田信長ヲ討タントス、信長兵ヲ遣リ討テ之ヲ破ル、次テ成ヲ行フ、既ニシテ義昭復兵ヲ擧グ、信長急ニ攻テ之ヲ破リ義昭ヲ河内ニ放ツ、是ヨリ信長足利氏ニ代テ政令ヲ京師ニ出ス、尋テ朝

倉淺井等ノ諸氏悉ク信長ノ滅ス所トナル、是歲武田晴信卒ス子勝頼嗣グ、○三年五月、武田勝頼大擧シテ三河ニ入り長篠城ヲ圍ム、信長徳川家康ヲ助ケ勝頼ト戰テ大ニ之ヲ破ル、○四年正月、信長近江ノ安土ニ築キ移テ居ル、○五年、信長羽柴秀吉ヲシテ山陽道ヲ略セシム、秀吉進テ播磨ニ至リ備前ノ浮田直家ト戰テ互ニ勝敗アリ、○六年三月、上杉輝虎卒ス姪景勝嗣グ、○十年二月、信長其子信忠ト大擧シテ武田氏ヲ討ツ、北條氏ノ兵モ亦來リ會シ、勝頼ヲ天目山ニ殺ス、乃チ武田

氏ノ故地ヲ諸將ニ分チ與ヘ、瀧川一益ヲ以テ關東ノ管領トナシ、上野ノ厩橋ニ居リ以テ北條氏ニ備ヘシム。○五月、秀吉但馬因幡ノ諸城ヲ降シ、進テ備中ニ入り高松城ヲ圍ム、毛利氏大舉シテ來リ救フ、秀吉乃チ援ヲ信長ニ請フ、信長其將明智光秀等ヲシテ先ツ發セシメ、自ラ信忠ト進テ京師ニ入ル。○六月、信長光秀ノ殺ス所トナル、信忠モ亦之レニ死ス、信長跌蕩ニシテ權略アリ、人ヲ御スル嚴酷、遂ニ禍ニ及フ、初メ光秀事ヲ以テ信長ヲ怨ミ、遂ニ茲ニ及フ、秀吉變ヲ聞テ直ニ毛

利氏ト和シ師ヲ返ヘシ、光秀山城ノ山崎ニ戰テ大ニ之ヲ破ル、光秀逃レ走リ土兵ノ殺ス所トナル、是ニ於テ秀吉柴田勝家瀧川一益以下ノ諸將ト議シ、信忠ノ子秀信ヲ以テ信長ノ嗣トナシ、安土ニ居ラシム、是時ニ當リ秀吉ノ威權日々ニ盛ナリ、勝家一益等之ヲ嫉ミ、秀吉ヲ除カンテ謀ル。○十一年四月、秀吉勝家ト賤岳ニ戰ヒ大ニ之ヲ破ル、勝家走リテ越前ニ歸リ自殺ス、一益乃チ秀吉ニ降ル。○是歲、秀吉大坂城ヲ築キ移リ居ル。○十二年正月、秀信ノ叔父信雄、秀吉ト隙アリ、援

ヲ德川家康ニ請フ、家康大ニ秀吉ノ軍ヲ長湫ニ破ル、既ニシテ信雄家康皆秀吉ト和ス○十三年五月、秀吉兵ヲ遣リ土佐ノ長曾我部氏ヲ討テ之ヲ降ス、四國平ク、○七月、秀吉ヲ關白ニ拜シ、姓ヲ豐臣ト賜フ、○八月、秀吉佐々成政ヲ越中ニ攻メテ之ヲ降タシ、遂ニ上杉景勝ト成キヲ行ス、○天皇在位二十九年ニシテ位ヲ皇太孫ニ禪ル、第百七代 後陽成天皇ハ正親町天皇ノ皇孫ナリ、即位ノ歲、秀吉ヲ以テ太政大臣トナス、○十五年二月、秀吉大舉シテ薩摩ノ島津義久ヲ討チ之

ヲ降ス、初メ島津義久九州ヲ侵略シ、朝命ヲ奉セ、秀吉乃チ奏請シテ之ヲ討ツ、九州ノ諸城風ヲ望テ潰ユ、義久恐レテ降ヲ請ス、○十六年、秀吉使ヲ相摸ニ遣リ、北條氏政ニ諭シテ入朝セシム、答ヘス、明年復使ヲ遣リテ之ヲ諭ス、氏政至ラズ、○十八年二月、秀吉大舉シテ北條氏ヲ伐チ、小田原城ヲ圍ム、氏政固ク守リテ出テス、秀吉乃チ諸將ヲ遣リテ關東八州ノ諸城ヲ徇ヘ降ス、奧羽ノ諸將風ヲ望テ來歸ス、氏政等乃チ出テ降ル、是ニ於テ海内悉ク秀吉ニ服ス、乃チ北條氏ノ故地ヲ舉

テ徳川家康ニ與ヘ、江戸ニ築テ之レニ居ラシム○
十九年十二月、秀吉其姪秀次ヲ以テ關白トナシ
自ラ太閤ト稱ス、是ヨリ先キ秀吉既ニ海内ヲ平
ケ武ヲ海外ニ輝カサント欲シ、書ヲ朝鮮國王ニ
贈リ我兵ヲ導テ明ニ入ラシム、報ヲ得ス、是ニ於
テ職ヲ其姪秀次ニ讓リ征西ノ令ヲ布キ諸將ヲ
部署ス、○文祿元年四月、秀吉出テ、肥前ノ名古
屋ニ次ス、乃チ浮田秀家ヲ元帥トナシ、加藤清正
小西行長ヲ先鋒トナシ、先ツ朝鮮ヲ討タシム、清
正行長等道ヲ分テ進ミ勝ニ乘シテ國都ヲ陷ル、

明主兵ヲ出シテ朝鮮ヲ救フ、我兵撃テ之ヲ破ル、
○二年正月、明主復其將李如松ヲ遣リ大舉シテ
朝鮮ヲ援フ、小早川隆景等逆ヘ撃テ大ニ之ヲ碧
蹄館ニ破ル、如松乃チ明主ニ説キ使ヲ遣シテ和
ヲ議セシメテ曰ク、和成ラハ太閤ヲ奉シテ王ト
セント、行長等之ヲ秀吉ニ報シテ和ヲ講シ諸城
ノ圍ヲ解キ俘囚ヲ放還ス、○慶長元年九月、明及
朝鮮ノ使者至リ封冊及冕服ヲ秀吉ニ奉ス、秀吉
冊文ニ汝ヲ奉シテ日本國王トナスノ語アルヲ
聞キ、大ニ怒リ再征ノ令ヲ下ス、○二年正月、小早

川秀秋ヲ以テ元帥トナシ、兩先鋒及諸將皆前役ノ如クス、明主之ヲ聽キ、荊玠等ヲ將トシテ赴キ、援ケシム、加藤清正敵軍ノ最モ懼ル、所タリ、荊玠等因テ之ヲ蔚山ニ圍ム、清正淺野幸長等ト固ク守リテ屈セズ、○三年正月、諸將大舉シテ蔚山ヲ救フ、敵軍圍ヲ解テ去ル、○四月、秀吉使ヲ遣シテ元帥以下ノ十余將ヲ止メ、餘ハ皆罷メ歸ラシム、○七月、秀吉病篤シ、徳川家康ニ後事ヲ托シ、更ニ五大老三中老五奉行ヲ置キ、片桐且元ヲ以テ其子秀頼ノ傅ト爲シ、淺野長政石田三成ニ命シ、

朝鮮ニ往テ兵テ收メシム、尋テ薨ズ、秀吉雄才大畧アリ、群雄ヲ駕御シ、海内ヲ統一ス、諸將計ヲ聞テ將ニ歸ラントス、明ノ軍之ヲ追撃ス、島津義弘大ニ之ヲ新寨ニ破リ以テ我軍ヲ全フスルヲ得タリ、○四年正月、前田利家秀頼ヲ奉シテ大阪ニ移ル、徳川家康伏見ニ居リ、秀吉ニ代リテ天下ノ事ヲ決ス、既ニシテ利家薨ジ、家康ノ威權獨リ盛ナリ、石田三成、上杉景勝等ト家康ヲ除カンコトヲ謀リ、各其國ニ歸ル、○五年二月、家康景勝ニ促シテ西上セシム、景勝聽カズ、家康大ニ怒リ自ラ

諸軍二將トシテ東下ス、三成乃チ秀頼ノ命ヲ矯メ書ヲ遠近ニ移シテ兵ヲ徵ス、毛利輝元以下ノ諸將來リ會スルモノ多シ、乃チ兵ヲ遣リテ伏見ノ城ヲ陷ル、家康下野ノ小山ニ至リ變報ヲ得タリ、乃チ諸將ヲ會シテ戰畧ヲ議ス、井伊直政進テ曰ク、徳川氏天下ヲ取ル今日ニ在リ、宜シク速ニ西上シテ群雄ヲ掃蕩スベシト、家康之ニ從ヒ其子秀康ヲ留メ以テ景勝ニ備ヘ、兵ヲ分テ自ラ一軍ニ將トシテ東海道ヨリ進ミ、一軍ハ其子秀忠ヲ將トシテ東山道ヨリ進マシム、此時ニ當リ美

濃以東ハ東軍ニ屬シ、以西ハ西軍ニ屬ス、黒田孝高加藤清正九州ニ在リ、遙ニ東軍ニ應ズ、三成以下西軍ノ諸將家康ノ西上スルヲ聞キ戰ヲ議ス、浮田秀家大垣城ヲ守ラントス、三成聽カス、茲ニ於テ兩軍大ニ關ヶ原ニ戰ヒ勝敗未タ決セス、西軍ノ將小早川秀秋、黒田孝高ノ勸メニヨリ叛テ東軍ニ應ス、東軍之ニ乘シ鼓譟シテ進ム、西軍遂ニ大ニ敗ル、三成以下ノ諸將多ク捕獲セララル、是ヨリ先キ秀忠ノ軍山道ヨリ進ミ、真田昌幸ノ扼スル所トナリ進ムヲ得ス、遂ニ戰機ヲ失フ、家康

怒テ秀忠ヲ見ズ、既ニシテ事釋ク、是ヨリ天下ノ
權徳川氏ニ歸ス、是ニ於テ毛利上杉以下西軍ニ
應スル諸將ノ地ヲ削リ、戰功ノ將士ヲ賞ス、豊臣
秀頼僅ニ攝津河内和泉ノ六十余萬石ヲ領ス、○
六年、家康、儒士藤原惺窩ヲ召シテ治安ノ策ヲ問
ヒ、其門人林羅山ヲ舉テ顧問ニ備フ、茲ニ於テ文
教又起ル、又板倉勝重ヲ舉テ京師ノ所司代ト為
シ、事務ヲ司ラシム、○是歲、家康一向宗ノ僧光壽
ノ爲メニ寺ヲ六條ノ東ニ建ツ、初メ本願寺ノ僧
光佐、秀吉ノ西征ヲ助ク、秀吉爲メニ寺ヲ京師ノ

六條ニ建ツ、光佐ニ子光壽、光昭アリ、秀吉、光昭ノ
母ヲ入レテ妾トナシ、光昭ヲ以テ光佐ノ嗣トナ
ス、關ヶ原戰後、家康京師ニ入ル、光壽迎ヘテ戰捷
ヲ賀ス、是ニ於テ家康別ニ光壽ノ爲メニ寺ヲ建
テ、天下ノ門徒ヲシテ東西ノ本願寺ニ別テ屬セ
シム、○七年、前田利長、江戸ニ朝シ、天下ノ先トナ
ラン、一ヲ請フ、家康之ヲ避ケ、秀忠ヲシテ之ニ當
ラシム、是ヨリ天下ノ諸侯皆江戸ニ朝ス、○八年
二月、詔シテ家康ヲ以テ征夷大將軍ト爲ス、家康
其孫女ヲ以テ豊臣秀頼ニ配ス、○九年、令ヲ下シ

テ三十六町ヲ以テ一里トナス、一里毎ニ楸樹ヲ置ク、是歲藤堂高虎建議シテ諸侯ノ邸宅及ヒ質ヲ江戸ニ置カシム、○是ヨリ先キ家康宗義智ニ諭シ、朝鮮ヲ諷ジテ和ヲ成サシム、○十年四月、家康奏シテ軍職ヲ辭ス、詔シテ其子秀忠ヲ以テ征夷大將軍トナス、○十一年、家康諸侯ニ課シテ皇居ヲ修拓シ、次テ又大ニ江戸城ヲ修メシム、○十二年、家康又諸侯ニ課シテ駿府ニ城カンメ、自ラ茲ニ老ス、○十四年、島津家久家康ノ教ヲ奉シ、琉球ヲ招ク、應セズ、乃チ兵ヲ遣リテ之ヲ討タシメ、國

王以下大臣數十人ヲ擒ニス、乃チ琉球ヲ以テ島津氏ニ屬セシム、○十五年六月、家康豊臣秀頼ニ諭シ再ヒ京都ノ方廣寺ヲ造リ以テ秀吉ノ遺志ヲ繼ガシム、是ニ於テ豊臣氏ノ財力殆ント盡ク、又諸侯ニ課シテ其子義直ノ爲メニ尾張ノ名古屋ニ城カシム、○十六年三月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、在位二十五年、

國史初歩中卷終

國史初歩下卷

杉浦重剛



第百八代 後水尾天皇ハ後陽成天皇第三ノ
 皇子ナリ。○即位ノ歲幕府蘭人耶璵子ヲ江戸城
 内ニ置キ厚ク之レニ給ス。初メ豐臣氏耶蘇教ヲ
 嚴禁ス。其後禁稍弛ム。耶璵子上言シテ蠻教ヲ唱
 フルモ。皆禍心ヲ抱クヲ告久。因リテ此命アリ。
 乃チ更ニ令ヲ下シ。既ニ其教ヲ奉スルモノヲシ
 テ佛教ニ歸セシメ。從ハサルモノハ刑ニ處ス。乃

チ長寄ヲ以テ外國互市ノ場トナシ外舶ノ他港
ニ入ルヲ禁ス。○十八年十月、家康、江戸、駿府ニ老
中ヲ置キ以テ諸政ヲ掌ラシム。○十九年、方廣寺
成ル、秀頼又タ巨鐘ヲ鑄テ僧清韓ニ命ジテ之レ
ニ銘ゼシム、乃チ慶會ヲ行フ、公卿以下皆會ス、家
康鐘銘ニ國家安康ノ句アリ、序ニ大小ノ釋迦迭
ニ主伴ト爲ルノ語アルヲ見テ大ニ怒リ、以テ已
ヲ咀呪スルトナシ、其慶會ヲ止メシム、板倉勝重
使ヲ馳セテ之ヲ片桐且元ニ告グ、且元駿府ニ往
キ陳謝甚タカム、淀君且元ヲ疑テ之ヲ誅セント

ス、或間ニ居テ且元ヲ諭シ其邑ニ就カシム。○淀
君ノ嬖臣大野治長等秀頼ニ勸メテ兵ヲ舉ケシ
メ、檄ヲ四方ニ傳フ、真田幸村、長曾我部盛親、後藤
基次以下ノ諸將來リ會スルモノ多シ、然レ凡列
藩ノ將士應スルモノナシ、遂ニ守備ヲ修ム。○十
一月、家康、秀忠ト大軍ヲ率テ大阪ヲ攻ム、兵凡ソ
五十萬人、幸村、基次等善ク防キ、互ニ勝敗アリ、既ニメ
家康書ヲ城中ニ遺リ和ヲ議ス。○是歲、家康、林羅
山及ヒ五山ノ僧徒ニ命シ、遺書ヲ搜索セシメ、之
ヲ校寫シ、江戸及ヒ駿府ニ置ク。○元和元年四月、

大阪再舉ヲ謀リ戰畧ヲ議ス、真田幸村策ヲ立テ、曰ク、城未タ堅牢ナラス、居ナカラニシテ之ヲ守ルハ計ニアラス、宜シク速ニ京師ニ入り天子ヲ挾ミ以テ四方ニ號令スベシト、大野治長等聽カス、○五月、家康、秀忠ト大舉シテ軍リ、遂ニ大阪城ヲ陷ル、秀頼、淀君ト火ヲ糶倉中ニ避ケ、夫人、徳川氏ヲ送還ス、家康乃チ井伊直孝等ヲシテ之ヲ守ラシメ、將ニ處分スル所アラントス、直孝人ニ謂テ曰ク、是レ禍ヲ遺スノ道ナリト、秀頼ニ迫テ自殺セシム、豊臣氏亡フ、○是歲、家康、林羅山等ト議シ

貞永建武ノ式目ヲ參考シ、新式十三條、朝廷式十七條ヲ定ム、之ヲ元和令ト云フ、○二年四月、前征夷大將軍徳川家康薨ズ、家康深沈ニシテ大畧アリ、兵ヲ用ユル神ノ如シ、事ヲ處スルニ苟モセス、遂ニ能ク泰平ノ基ヲ開ク、薨ズルニ臨ミテ諸侯ニ諭シテ曰ク、天下ハ一人ノ天下ニアラス、吾死スルノ後、秀忠若シ政ヲ失ハバ、侯伯其器ニ當ルモノ宜シク之レニ代ルベシト、○三年二月、秀忠、家康ノ遺命ヲ以テ日光山ニ改葬ス、朝廷廟號ヲ東照ト賜フ、○五年、秀忠、其弟義直ヲ尾張ニ封シ、

國史初志 下卷
賴房ヲ常陸ノ水戸ニ封シ、賴宣ヲ紀伊ニ封ス、之ヲ三家ト稱ス、○九年六月、秀忠職ヲ辭シ其子家光征夷大將軍ニ任ス、是歲家光諸侯ヲ召シテ之レニ謂テ曰ク、吾カ祖考卿等ノ力ニ賴リテ天下ヲ定ム、故ヲ以テ特ニ禮遇ヲ加フ、家光ニ至リテハ生ナカラニシテ已ニ將軍タリ、今ヨリ卿等ヲ待ツニ君臣ノ禮ヲ以テスベシ、諸侯皆命ヲ聞ク、是ニ於テ德川氏ノ權益々固シ、○寛永元年、寛永寺ヲ創メ僧天海ヲ以テ主トナス、天海家康ノ信任スル所トナリ、常ニ幕議ニ參ス、德川氏ノ天下

ヲ經畧スル與リテ力アリ、時ニ之ヲ黒衣ノ相ト稱ス、○二年、伊勢ノ人山田長政暹羅ニ至ル、時ニ我國ノ士民此國ニ寓スルモノ多シ、國王長政ヲ舉テ其長トナス、會々其屬國ニ法ヲ奉セサルモノアリ、國王長政ヲシテ之ヲ討タシム、長政乃チ往キ討テ之ヲ平ラク、遂ニ暹羅ノ國相トナリ、威四隣ニ振フ、○六年、天皇位ヲ興子内親王ニ禪ル、在位十八年、

第百九代 明正天皇ハ後水尾天皇第二ノ皇女ナリ、○九年十二月、德川義直孔子ノ廟ヲ江戸ノ

忍ヶ岡ニ建ツ。○十二年七月長岑ニ令シ外國商
船ノ互市ヲ停メ且ツ耶蘇教ヲ嚴禁ス又我國ノ
商船外國ニ往テ貿易スルヲ禁シ三檣ノ船ヲ廢
ス。○十四年八月小西行長ノ遺臣等耶蘇教ヲ奉
スルモノ天草四郎時貞ヲ推シテ將トナシ有馬
ノ故城ヲ修メテ之レニ據ル幕府西海ノ諸藩ニ
令シテ之ヲ討セシム。明年ニ至リテ平久。○二十
年十月天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル。在位十四年。
第百十代 後光明天皇ハ後水尾天皇第四ノ
皇子ナリ。○正保三年清ノ兵明ニ入り明將ニ亡

ヒントス。明ノ將軍鄭芝龍書ヲ幕府ニ上リ援ヲ
請フ幕府應セス。芝龍嘗テ肥前ノ平戸ニ來リ妻
ヲ娶リテ成功ヲ生ム。成功ハ即チ國姓爺ナリ。○
慶安元年近江ノ人中江藤樹没ス。藤樹王陽明ノ
學ヲ修ム。篤行ノ君子ナリ。世ニ近江聖人ト云フ。
○四年四月征夷大將軍德川家光薨ズ。子家綱嗣
ク。處士由井正雪丸橋忠彌等喪ニ乘シテ亂ヲ爲
サントス。事敗レテ誅セラレ。○承應三年九月天
皇崩ズ。在位十一年。

第百十一代 後西院天皇ハ後水尾天皇第七ノ

皇子ナリ。○明曆三年正月、林羅山没ス、羅山又道春ト號ス、家康ノ信任スル所トナリ、一代ノ儒宗タリ、著ス所ノ書百數十種、其子孫世々幕府ノ儒官タリ。○萬治元年六月、明ノ鄭成功使ヲ遣ハシテ、援兵ヲ請フ、幕府之ヲ辭ス。○二年二月、明ノ朱之瑜、長寄ニ來リテ、援兵ヲ請フ、既ニシテ明ノ亡フルヲ聞キ、留テ歸ラス、水戸ノ藩主、德川光圀之ヲ聘シ、以テ賓師ト爲ス、光圀、文學ヲ好ミ、名節ヲ尚ブ、四方有名ノ士ヲ聘シテ、大日本史等ノ諸書ヲ撰シ、以テ尊王ノ意ヲ寓ス。○寛文二年、幕府方

廣寺ノ佛像ヲ毀チ、錢ヲ鑄ル、今ノ文錢是レナリ。○三年正月、天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル、在位八年、第百十二代、靈元天皇ハ、後西院天皇ノ皇弟ナリ。○五年七月、天下ニ令シテ、布帛ノ長貳丈六尺ヲ以テ一反ト爲ス。○十一年四月、幕府仙臺ノ支藩伊達宗勝ノ封ヲ奪フ、初ノ宗勝、宗藩ノ宰原田直則ト謀リ、幼主ヲ殺シ、其子ヲ立テントス、事露ハレ、遂ニ是ニ及フ。○十二年三月、石川丈山歿ス、丈山、學ヲ藤原惺窩ニ受ケ、同門ノ林羅山、那波道圓、松永昌三等ト名ヲ等フス。○延寶八年五月、征

夷大將軍德川家綱薨ズ弟綱吉嗣グ○天和二年五月備前岡山ノ藩主池田光政卒ス光政新太郎少將ト稱ス英明ニシテ學ヲ好ミ儒士熊澤蕃山ヲ舉テ國政ヲ掌ラシム封内大ニ治マル○是歲將軍綱吉儒士木下貞幹ヲ聘ス其門下ニ多ク名士ヲ出ス新井白石室鳩巢等最モ名アリ同時ニ山寄闇齋アリ程朱ノ學ニ精シク晚ニ神道ヲ好ミ神學ノ中祖トナル○貞享元年曆法ヲ改正シ名ケテ貞享曆ト云フ清和天皇ノ貞觀中曆法ヲ改テヨリ以來是ニ至ルマテ八百貳拾四年○三年

八月朝鮮琉球通商ノ法ヲ定ム○四年三月天皇位ヲ皇太子ニ禪ル在位二十四年
第百十三代 東山天皇ハ靈元天皇第四ノ皇子ナリ○元祿四年四月是ヨリ先キ幕府學校ヲ神田ニ建ツ是ニ至リテ成ル之ヲ聖堂ト稱ス孔子及ヒ十哲ノ像ヲ作り之ヲ安置ス林信篤ヲ奏シテ大學頭ニ任シ以テ聖堂ノ事ヲ掌ラシム初メ足利氏ノ時五山ノ僧徒等文學ヲ司トル是ヨリ以來儒ヲ以テ業トスルモノ皆祝髮シテ其風ニ習フ是ニ至リテ初メテ此風ヲ改ム○五年九月

德川光圀、楠正成ノ爲メニ碑ヲ湊川ニ建テ其面ニ刻シテ曰ク、嗚呼忠臣楠子之墓ト、自ラ之ヲ書シ、朱之瑜ノ文ヲ其背ニ刻ス。○十一年、綱吉、柳澤保明ヲ以テ老中ノ首坐ト爲シ、偏名ヲ賜フテ吉保ト云フ。○十四年正月、僧契仲歿ス、契仲、萬葉ノ古風ヲ倡ヘ、國學復古ノ嚆矢タリ。○三月、播磨赤穂ノ藩主、淺野長矩、吉良義英ヲ江戸城中ニ傷ク、幕府長矩ニ死ヲ賜ヒ其封赤穂ヲ奪フ。○十五年十二月、長矩ノ遺臣大石良雄以下四十七人、義英ノ邸ヲ襲ヒ義英ヲ殺シ以テ仇ヲ報ス、明年幕府

良雄等ニ死ヲ賜フ。○寶永二年三月、儒士伊藤仁齋歿ス、仁齋京師ノ堀川ニ居リ古學ヲ倡フ、繼テ荻生徂徠古文辭ノ學ヲ江戸ニ倡ヘ東西相拮抗ス。○六年征夷大將軍德川綱吉薨ズ、綱吉、柳澤吉保ノ子吉里ヲ愛シ視ル、子ノ如ク養テ子ト爲シ大ニ之ヲ封セント欲ス、未タ果タサスシテ暴ニ薨ズ、家宣職ヲ嗣キ吉保ヲ斥ケ弊政ヲ改ム、家宣世子タル時ヨリ新井白石ヲ任用シ、是ニ至リテ大政ニ參與セシム、白石博學恰聞和漢ノ典故ニ通シ、又西洋ノ事實ヲ講究ス、我國洋學ノ起ル白

石ヲ嚙矢トス。○是歲天皇位ヲ皇太子ニ禪ル在位二十三年。

第百十四代 中御門天皇ハ東山天皇第五ノ皇子ナリ。○正徳二年征夷大將軍徳川家宣薨ズ子家繼職ヲ嗣ク。○享保元年四月征夷大將軍徳川家繼薨ス。徳川頼宣ノ孫吉宗紀伊ヨリ入テ職ヲ嗣グ。○二十年三月天皇位ヲ皇太子ニ禪ル在位二十五年。

第百十五代 櫻町天皇ハ中御門天皇第一ノ皇子ナリ。○元文五年吉宗其四子宗尹ノ第一橋

ニ置ク之ヲ一橋家ト稱ス。○寛保二年幕府ノ儒臣青木昆陽甘藷ノ種ヲ薩摩ヨリ取り其著ハス所ノ蕃藷考ヲ併セテ之ヲ諸國ニ頒ツ世因テ稱シテ甘藷先生ト云フ。是ヨリ先キ新井白石和蘭ノ學ヲ開ク未タ世ニ行ハレス。昆陽之ヲ繼ギカメテ之ヲ弘ム。○延享元年初メテ甘蔗ヲ傳フ。○二年九月吉宗職ヲ辭ス子家重嗣グ。○四年五月天皇位ヲ皇太子ニ禪ル在位十三年。

第百十六代 桃園天皇ハ櫻町天皇第一ノ皇子ナリ。○寶曆元年前征夷大將軍徳川吉宗薨ズ吉宗

聰明勇決前代ノ弊政ヲ改メ、文武ヲ弊勵シ德川氏中興ノ主タリ、又大岡忠相ヲ擧テ江戸ノ町奉行トナス、訟獄平允能ク其職ニ稱フ、天下大ニ治マル、○八年、是ヨリ先キ處士竹内式部ナルモノ公卿ノ家ニ出入シ、皇室ノ衰態ヲ恢復センコトヲ説ク、幕府之ヲ忌ミ式部ヲ逐フ、公卿以下罪ニ坐セラル、モノ多シ、○十年四月、家重職ヲ辭ス、家治嗣グ、○十二年、天皇崩ズ在位十五年、第百十七代 後櫻町天皇ハ櫻町天皇○第二ノ皇女ナリ、○明和三年、幕府處士山縣大貳ヲ刑ニ

處ス、大貳博洽ニシテ兵學ニ通ズ、皇室ノ凌遲ヲ慨キ、竹内式部等ト共ニ謀ル所アリ、其徒數百人、幕府之ヲ忌ミ捕ヘテ獄ニ下ス、明年大貳ヲ梟シ式部ヲ流ス、○六年十月、加茂真淵没ス、真淵、荷田春滿ニ學ヒ國學ニ精シ、國學ノ中興スル真淵與リテカアリ、○七年十一月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル在位八年、

第百十八代 後桃園天皇ハ桃園天皇第一ノ皇子ナリ、○安永元年五月、家治、田沼意次ヲ以テ老中ト爲ス、意次家治ノ寵任スル所トナリ、權内外

ヲ傾ケ、賄賂公行ス。○八年十月、天皇崩ズ、在位十年、

第百十九代 光格天皇ハ東山天皇ノ皇曾孫ナリ。○天明六年九月、征夷大將軍德川家治薨ズ、一橋家齊職ヲ嗣グ、家治遺命シテ田沼意次ノ職ヲ罷メ、其封ヲ收メシム。○七年六月、幕府陸奥白河ノ藩主松平定信ヲ以テ老中トナス、定信性勤儉、學ヲ好ミ、政事釐革スル所多シ。○寛政二年正月、幕府天下ニ令シ、奢侈ヲ禁シ、又旗下ノ士ニ令シテ文武ヲ講究セシム。○三年十月、幕府初メテ醫

學館ヲ置ク。○五年正月、前大納言中山愛親、江戸ニ至リ、天皇ノ生父太宰帥親王ヲ尊テ太上天皇トナスノ旨ヲ傳フ、幕議之ヲ難ンス、愛親等抗辨事遂ニ調ハス。○七月、幕府和學講談所ヲ置キ、塙檢校ヲシテ之ヲ掌ラシム。○九月、魯西亞使ヲ遣リテ通商ヲ請フ、幕府許サス。○是歲、上野人高山正之歿ス、正之慷慨ニシテ節ヲ尚フ、最モ皇室ノ衰態ヲ慨キ、諸國ニ周遊シ、勤王ノ士ヲ鼓舞ス、同時ニ下野ノ蒲生君平アリ、正之ト志ヲ同フシ、山陵志、職官志ノ諸書ヲ著ハシ、以テ尊王ノ意ヲ寓

ス、仙臺ノ林子平モ亦時ヲ同フス、子平倜儻ニシテ大志アリ、最モ心ヲ海防ニ留メ海國兵談、三國通覽等ヲ著ハス、○十年、曆ヲ改メ之ヲ寛政曆ト謂フ、○享和元年、本居宣長没ス、宣長加茂真淵ニ從ヒ國學ヲ精究シ著ス所ノ書甚タ多シ、其後平田篤胤アリ、宣長ノ墓ニ至リ誓テ弟子トナリ益々國學ヲ開宏シ國體ヲ明ニスルヲ以テ任トナス、世ニ真淵、宣長、篤胤ヲ三大人ト稱ス、○文化元年九月、魯西亞ノ使復來リ通商ヲ請フ許サズ、○四年五月、魯西亞ノ軍艦蝦夷ニ寇ス、是ヨリ以來

數々來リ侵ス、○十四年三月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル在位三十七年、

第百二十代 仁孝天皇ハ光格天皇第四ノ皇子ナリ、○天保三年九月、賴山陽歿ス、山陽慷慨ニシテ大節アリ、文章ヲ善クス、日本外史、日本政記等ノ諸書ヲ著ハシ以テ尊王ノ意ヲ寓シ士氣ヲ鼓舞ス、○八年二月、大坂町奉行ノ屬吏大塩平八郎亂ヲ爲ス、尋テ平ク、○八月、家齊職ヲ辭ス、子家慶嗣グ、○十一年、上皇崩ズ、諡シテ光格ト謂フ、宇多天皇謚法ヲ停メテヨリ此典ヲ廢スル六十年代茲

二至リテ之ヲ復ス。○十三年、幕府令ヲ下シテ奢侈ヲ禁ス。時ニ水野忠邦老中トナリ、松平定信ノ政蹟漸ク廢弛スルヲ嗟キ、節儉ヲ主トスヘキノ令ヲ下ス。其令煩苛ナルモノ多ク衆心服セス。是歲曆法ヲ改メテ天保曆ト云フ。○弘化元年三月、和蘭ノ使者書ヲ幕府ニ呈シ、西洋諸國我國ヲ覬覦スルノ狀ヲ告ク。○五月、幕府水戸ノ藩主徳川齊昭ヲシテ退隱セシム。是ヨリ先キ齊昭、藤田東湖等ノ諸名士ヲ舉ケ國政ニ參與セシメ文武ヲ獎勵シ兵馬ヲ操練ス。天下其治ヲ稱ス。幕府其異

志アルヲ疑ヒ之ヲ幽ス。藤田以下皆罪セラレ。○二年十二月、家慶公卿ノ爲メニ學舎ヲ建ツ。天皇之ヲ嘉シ名ヲ學習院ト賜フ。○三年正月、天皇崩ズ。在位三十年。

第百廿一代 孝明天皇ハ仁孝天皇第四ノ皇子ナリ。○嘉永二年、和蘭人始メテ種痘法ヲ傳フ。○六年六月、米利堅ノ兵艦浦賀ニ來ル。奉行、屬吏ヲ遣リテ其來意ヲ問ハシム。使節波理對テ曰ク、國命ヲ奉シテ通商ヲ求ムト。奉行乃チ之ヲ幕府ニ報ス。幕府諸候ニ令シ近海ノ要地ヲ守ラシメ奉

行ヲシテ陂理ニ接シ國書ヲ受ケシム且之ニ告
テ曰ク衆議ヲ盡シテ後ニ答ヘント陂理乃チ明
年ノ再航ヲ約シテ去ル是ニ於テ幕府米國ノ書
翰ヲ譯シ諸侯及ヒ旗下ニ示シ和戰ノ利害ヲ陳
セシム○六月征夷大將軍德川家慶薨ズ子家定
職ヲ嗣グ○七月魯西亞ノ兵艦長寄ニ至リ樺太
ノ境界ヲ定メ互市場場ヲ開キ隣交ヲ修ムルヲ請
フ幕府答フルニ熟議シテ後事ニ從フベキヲ以
テス魯使乃チ去ル○十一月幕府德川齊昭ヲ起
シテ海防ノ事務ニ參與セシム○是歲諸藩ニ令

正月

シ軍艦ヲ造ラシメ砲臺ヲ品川海ニ築キ大砲ヲ
鑄ル又蒸氣船及ヒ軍艦ヲ和蘭ニ購ヒ日章ノ旗
ヲ以テ船舶ノ記號トナス又長寄ノ人高島秋帆
ヲ伊豆韭山ノ代官江川太郎左衛門ニ屬シ西洋
ノ砲術ヲ傳ヘシム○安政元年五月陂理再ヒ軍
艦ヲ率テ武藏ノ本牧ニ船シ去年ノ答書ヲ求ム
齊昭等之ヲ拒絕セン一ヲ議ス幕府從ハズシテ
下田箱館長寄ノ三港ニ船スルヲ許シ尋テ魯西
亞和蘭ニモ亦下田以下ノ諸港ニ船スルヲ許ス
陂理ノ下田ニ船スルヤ長門ノ人吉田松陰密カ

ニ其艦ニ投シテ海外ニ航セシテ請フ、彼理肯
ンセズシテ之ヲ送り歸ス、初メ松陰、信濃ノ久佐
久間象山ニ就テ學フ、象山之二謂テ曰ク、方今ノ
急務ハ海外ニ航シテ其形勢ヲ詳ニスルニアリ
ト、松陰之ヲ聞キ感奮シ遂ニ此舉ニ及フ、然レ凡
事成ラズシテ各其藩ニ幽セララル、○二年和蘭ニ
托シテ製スル所ノ蒸氣船成ル、幕府乃チ勝麟太
郎等ヲ長崎ニ遣リテ其運用ヲ學ハシム、○三年
二月、幕府蕃書調所ヲ創立シ以テ洋書ヲ講習セ
シム、後チ之ヲ開成所ト改ム、○七月、亞米利加ノ

使節巴爾理斯、國書ヲ持シ下田ニ來リ、本國ヨリ
日本ニ滞在スヘキ事ヲ委任セララル、ヲ告ク
因テ自ラ將軍ニ謁シ其書ヲ呈セシテ請フ、○
是歲堀田正篤ヲ以テ老中ノ首座トナシ、外國事
務ノ總裁ヲ命ズ、○四年五月、是ヨリ先キ巴爾理
斯將軍ニ謁セシテ請フ、是ニ至リテ之ヲ許ス、
又神奈川江戸ノ兩港ヲ開キ條約ヲ定メンテ請
フ、幕府之ヲ朝廷ニ請フ許サレズ、徳川齊昭幕
議ヲ悦ハズ、因テ其議ニ參スルヲ辭ス、○五年正
月、幕府老中堀田正篤ヲ京師ニ遣ハシ再ヒ前議

ヲ請フ、事行ハレス、然シテ巴爾理斯切リニ幕府ニ迫リ答書ヲ求ム。○四月、幕府近江彦根ノ藩主井伊直弼ヲ舉テ大老トナシ、政務ヲ總裁セシム、直弼乃チ米使ニ仮條約ヲ許シ、而シテ後ニ之ヲ京師ニ奏ス、尋テ魯、英、佛ノ三國ト同シク、仮條約ヲ結ヒ、以テ貿易ヲ開ク、皆朝裁ヲ經ズシテ之ヲ專決ス、天下其專横ヲ憤リ、討幕攘夷ノ說大ニ起ル。○八月、征夷大將軍德川家定薨ズ、嗣ナシ、幕府ノ親藩皆望ヲ一橋慶喜ニ屬シ、之ヲシテ職ヲ嗣ガシメント欲ス、慶喜ハ齊昭ノ子ナリ、然レモ直弼

聽カズ、家茂ヲ紀伊ヨリ迎ヘテ之ヲ立ツ、年甫テテ十二、遂ニ親藩ノ主ヲシテ其邸ニ黜居セシム、會々朝廷水戸、尾張、越前ノ藩主及ヒ直弼ヲ召シ、議スル所アラントス、直弼命ヲ奉セス。○九月、朝廷乃チ内敕ヲ齊昭ニ下シ、幕政ヲ匡正シ、國事ヲ更張セシム、直弼内敕ノ下ルヲ謀知シ、其謀ニ與ルモノ及ヒ先キニ一橋慶喜ヲ立テン、一ヲ周旋セシ者ヲ捕フ、梅田源次郎、賴三、樹三郎、橋本左内以下捕ヘラルモノ六十余人、明年ヲ以テ其獄ヲ決シ、齊昭以下事ニ與ルモノヲ幽閉シ、賴橋本等

ヲ斬ニ處シ其他流若クハ禁錮ニ處セラル、モ
ノ頗ル多シ、吉田松陰モ亦刑ニ死ス、初メ松陰藩
ニ幽セララル、ノ後尊攘ノ説ヲ以テ藩論ヲ鼓舞
シ壯士ヲ誘掖ス、因テ幕府ノ嫌疑ヲ受ク、遂ニ是
ニ及ブ、是歲幕府神奈川長寄箱館ノ三港ヲ開ク、
○萬延元年正月、幕府初メテ使節ヲ亞米利加ニ
遣ル、○三月、浪士大老井伊直弼ヲ江戸ノ櫻田ニ
要撃シテ之ヲ殺ス、○文久元年二月、水戸脱藩ノ
士二千入總野ノ間ニ屯集シ攘夷ヲ倡フ、幕府近
方ノ諸藩ニ命シテ之ヲ鎮定セシム、又旗下ノ士

ヲ遣リテ横濱ヲ守ラシメ、諸侯ニ命シテ洋人ノ
館スル所ノ諸寺ヲ守ラシム、○五月、浪士東禪寺
ヲ襲ヒ英人ヲ傷ク、英ノ公使怒テ兵ヲ用ヒ幕府
ニ迫ラントス、幕府百方之ヲ謝シ事僅ニ止ムヲ
得タリ、○十一月、皇妹内親王和宮東下シテ將軍
家茂ニ配ス、幕府ノ請ニ從フナリ、○二年正月、是
ヨリ先キ、井伊直弼ノ死スルヤ、安藤信正代リテ
幕政ヲ執ル、浪士其專横ヲ憤リ之ヲ途ニ要撃ス、
信正僅ニ身ヲ以テ免カル、尋テ幕府其執政ヲ止
ム、○三月、長門萩ノ藩主毛利齊親幕府ニ説テ、越

前福井ノ藩主松平慶永及ヒ一橋慶喜ヲ舉テ將
軍ノ補翼トナシ、諸嘗テ正義ヲ以テ作ケラル、
モノヲ撰用セシメ、且其臣永井雅樂ヲ舉テ共ニ
事ヲ謀ラシム、雅樂世務ニ練達シ開港ノ議ヲ倡
フルモノナリ、幕府命シテ京師ニ入り其説ヲ條
陳セシム、然レ氏當時攘夷ノ論頗ル盛ニシテ雅
樂ノ説遂ニ行ハレス、○四月、浪士平野次郎以下
數百人島津又光ヲ播磨ニ要シ、書ヲ出シテ攘夷
ノ先鋒タランヲ請フ、又光之ヲ撫安シ率テ伏
見ニ至リ、自ラ京師ニ入りテ之ヲ奏ス、朝廷乃チ

又光ニ命シテ其徒ヲ鎮撫セシム、毛利定廣モ
亦京師ニ入ル、詔シテ島津氏ト共ニ浪士ヲ鎮撫
セシム、尋テ山内豐範モ亦至リ同ク鎮撫ノ命ヲ
受ク、是ニ於テ薩長土ノ威望天下ニ冠タリ、○六
月、朝廷敕使大原重徳ヲ江戸ニ下タシ三事ヲ宣
ス、曰ク、將軍入朝ノ典ヲ舉グベシ、曰ク、五大老ヲ
舉テ國政ニ參與セシムヘシ、曰ク、一橋慶喜ヲ將
軍ノ補佐トナシ、松平慶永ヲ大老ニ任スヘシ、幕
府命ヲ奉ス、敕使ノ東下スルヤ、島津又光之ヲ護
衛ス、途ニ英人某ノ無禮ヲ怒リ之ヲ斬ル、是歲幕

府非政ヲ改革シ諸有司ヲ黜陟シ、一橋慶喜ヲ將
軍ノ補佐トナシ、松平慶永ヲ政務總裁トナシ、會
津ノ藩主松平容保ヲ以テ京師ノ守護職トス、又
大ニ舊制ヲ改メ諸侯ノ夫人世子ヲシテ悉ク國
ニ就カシム、○文久三年正月、一橋慶喜、松平慶永
等京師ニ入ル、既ニメ家茂入朝ス、是時ニ當リ諸
侯ノ京師ニアルモノ八十餘藩、京師ノ熱鬧前古
比ナシ而メ浪士連リニ攘夷ヲ以テ朝廷幕府ニ
逼ル、松平慶永職ヲ辭シテ國ニ歸ル、○四月、家茂
諸侯ヲ率テ入朝シ諸公卿ト議シ本年五月十日

ヲ以テ攘夷ノ期トナス、天皇乃チ男山ニ幸シ攘
夷ノ節刀ヲ將軍ニ授ケント欲ス、將軍病ヲ以テ
辭シ慶喜ヲシテ之ニ代ラシム、慶喜モ亦之ヲ辭
ス、諸慷慨ノ士怒テ幕府頼ム可カラストシ、天皇
ノ親征ヲ促ス、朝廷乃チ慶喜ヲ江戸ニ下タシ、水戸
ノ藩主徳川慶篤ト共ニ鎖港ノ事ヲ謀ラシム、慶
喜等老中小笠原長行ニ命シ各國公使ニ鎖港ノ
一ヲ告ゲシム、公使等聽カズ、○五月、英國ノ軍艦
品川ニ來リ先キニ島津久光ノ斬殺セル英人ノ
爲メニ贖金ヲ要求ス、幕府大ニ謀議ニ苦シミ遂

ニ之ヲ與フ、○七月、英艦鹿兒島ニ至リ更ニ死者ノ遺族ノ爲メニ贖金ヲ求ム、島津氏將ニ答フル所アラントス、英人先ツ發シテ其船舶ヲ奪フ、乃チ交戦シ互ニ死傷アリ、島津氏遂ニ金ヲ幕府ニ借り之ヲ英人ニ與フ事乃チ平久、是ヨリ先キ長藩モ亦大ニ砲臺ヲ下ノ關ニ修メ外船ノ過クル毎ニ之ヲ砲撃ス、幕府使ヲ遣リテ恣ニ戦端ヲ開クヲ責ム、藩人服セズ、○八月、天皇大和ニ幸シ親征ノ典ヲ舉ゲントス、議俄カニ變シ中川宮、松平容保等救ヲ傳ヘテ三條實美以下ノ七卿ヲ黜ケ、長

藩ノ宿衛ヲ止メ薩藩ヲシテ之ニ代ラシム、長藩ノ士乃チ七卿ヲ擁シテ國ニ歸ル、朝廷七卿ノ官爵ヲ削リ毛利氏ノ入京ヲ禁ス、○是月、浪士藤本鐵石、松本謙三郎等廷臣中山忠光ヲ奉シテ兵ヲ大和ニ舉ケ攘夷ノ先鋒タラント欲ス、朝議ノ俄カニ變スルヲ聞キ天川辻ノ嶮ニ據ル、幕府兵ヲ遣リ討テ之ヲ平ク、○十月、平野次郎等モ亦澤宣嘉ヲ奉シテ兵ヲ但馬ノ銀山ニ舉ク、幕府諸藩ニ命シ討テ之ヲ平ケシム、是歲、幕府使節ヲ外國ニ遣シテ鎖國ノ事ヲ謀ラシム、後要領ヲ得スシ

テ歸ル○元治元年正月、家茂再ヒ京師ニ朝ス。○五月、朝廷政權ヲ幕府ニ委任ス、既ニシテ家茂東ニ歸ル、是時ニ當テ水戸ノ藩士黨ヲ分テ相軋ル、藤田東湖ノ子小四郎正義黨ノ魁タリ、市川三左衛門姦黨ノ魁タリ、是ニ至リテ姦黨志ヲ得テ正義黨ヲ排ス、小四郎等兵ヲ率テ筑波山ニ據ル、藩老武田耕雲齋モ亦正黨ニ入ル、幕府諸藩ニ命シテ之ヲ討タシム。○七月、是ヨリ先キ長藩ノ士上書シテ七卿ノ復職及ヒ藩主ノ入朝ヲ許サレントテ請フ、省セラレズ、是ニ於テ筑後ノ人真木和

泉長藩ノ士久坂義助等、長藩ノ老國司信濃益田右衛門介、福原越後等ヲ擁シ兵ヲ率テ京師ノ近郊ニ屯シ將ニ請フ所アラントス、一橋慶喜、松平容保等朝廷ニ請ヒ追討ノ令ヲ下タズ、長人之ヲ聞キ君側ヲ清メント欲シ、兵ヲ分テ皇居ニ迫ル、薩州會津大垣等ノ兵討テ之ヲ退ク、和泉義助以下皆死ス。○八月、幕府奏請シテ毛利氏ノ官爵ヲ削リ追討ノ令ヲ下タス、尾張名古屋ノ藩主徳川慶勝ヲ以テ總督トナシ、薩州以下二十一藩ニ命シテ事ニ從ハシム。○是月、英米蘭三國ノ兵艦長

州下ノ關ヲ砲擊ス、長兵防ギ戰ヒ互ニ勝敗アリ、
既ニメ和ヲ議ス、各國ノ公使幕府ニ迫リ贖金ヲ
求ム、幕府之ニ應ス、事乃チ平ク、○十一月、武田耕
雲齋、藤田小四郎等、幕府ノ兵ト戰ヒ屢々之ヲ破
ル、既ニメ糧盡キ支フル能ハス、乃チ京師ニ至リ
事ヲ訴ヘント欲シ、中仙道ヲ經テ越前ニ至ル、一
橋慶喜自ラ將トメ之ヲ討タントシ、近江ノ海津
ニ至ル、耕雲齋乃チ書ヲ慶喜ニ呈ス、慶喜容レズ
乃チ加州藩ニ降り刑ニ死ス、○十二月、徳川慶勝
諸藩ノ兵ヲ率テ安藝ニ次シ、毛利氏ノ罪ヲ問フ、

是ヨリ先キ長藩黨ヲ分チ、先キニ京師ノ事ニ與
ルモノヲ激論黨トシ、恭順ヲ主トスルモノヲ俗
論黨トス、是ニ於テ俗論黨、藩主ヲ寺院ニ屏居セ
シメ、福原以下京師ノ事ニ與ルモノ十三人ヲ刑
シ、罪ヲ謝ス、慶勝乃チ狀ヲ幕府ニ聞シ、征討ノ師
ヲ還ヘス、○慶應元年正月、初メ長藩ノ士高杉晋
作、久坂義助等ト謀リ、藩ニ請テ勇悍ノ士民ヲ編
制シテ奇兵隊ヲ創立ス、晋作、義助共ニ吉田松陰
ノ高弟タリ、義助先キニ京師ニ戰死ス、晋作逃レ
テ筑前ニ在リ、是ニ至リテ國老以下ノ死ヲ聞テ

大ニ憤リ密ニ下ノ關ニ歸リ、檄ヲ傳ヘテ兵ヲ集ム、來リ會スルモノ五百人乃チ山縣狂介等ト謀リ、俗論黨ト戰テ之レニ克チ、其首謀數人ヲ刑シ以テ藩論ヲ定メ益々守備ヲ修ム、幕府之ヲ聞キ再ヒ追討ノ令ヲ下タス、徳川慶勝、勝安房等之ヲ諫ム、聽カズ、○初メ長藩過テ薩藩ノ兵艦ヲ下關ニ砲撃ス、薩人之ヲ含ミ互ニ隙アリ、茲ニ至リ薩藩ノ士西郷隆盛、小松帶刀等怨ヲ長州ニ釋カン、ヲ議ス、會々土佐ノ人坂本龍馬、長州ニ在リ間ニ居テ之ヲ和解シ、兩藩遂ニ好ヲ通ス、而ノ幕府未タ之ヲ

知ラス、家茂大舉シテ大阪ニ至ル、○十月、各國ノ公使條約ノ救許及ヒ兵庫ノ開港ヲ請フ、家茂奏シテ救許ヲ請フ、朝議條約ノ更正ヲ許シ、兵庫ヲ開クヲ許サズ、○二年四月、幕府長藩ニ令シテ曰ク、封十萬石ヲ削リ藩主父子ヲ終身禁錮シ、福原以下三國老ノ後ヲ絶ツ、命ヲ奉スレハ征討ノ師ヲ止メント、因テ答書ヲ出サシム、是ニ於テ長藩一意戰ニ決シテ答書ヲ出サズ、幕府乃チ朝廷ニ奏シ、軍ヲ長防ノ四境ニ進ム、長ノ諸將能ク防ギ幕軍屢々利ヲ失フ、○八月、征夷大將軍徳川家茂

薨ズ、慶喜職ヲ嗣グ、詔シテ征長ノ軍ヲ還ス。○是歲、天皇崩ズ、在位二十一年、

第百二十二代 今上天皇ハ孝明天皇第一ノ皇子ナリ、○慶應三年四月、松平慶永、鍋島齊正、山内豐信、島津久光等京師ニ入ル、慶喜之ト議シ、奏請シテ兵庫港ヲ開ク、○九月、山内豐信、慶喜ニ上書シテ大政ヲ朝廷ニ奉還シ、萬國ト并立スルノ基礎ヲ立テシメ、勸メ、且其臣後藤象次郎等ヲ遣リテ政權ヲ解ク、○將軍ニ説カシム、薩藩ノ士小松帶刀等モ亦政權ヲ解クノ要ヲ説ク、慶喜乃

チ上表シテ軍職ヲ罷メ、大政ヲ奉還セン、○ヲ請フ、朝廷之ヲ許シ、且敕シテ曰ク、國家ノ大事及外國ノ處置ハ之ヲ衆議ニ附シ、諸侯ノ進退ハ朝廷之ヲ掌リ、其他ハ暫ク舊ニ仍ルベシト、幾モナク敕シテ會津、桑名兩藩ノ宿衛ヲ止メ、薩土以下ノ諸藩ヲシテ之ニ代ラシメ、攝政、關白及ヒ幕府以下ノ職號ヲ廢シ、假リニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置キ、公卿、藩主及ヒ藩士ヲ以テ之ニ任シ、以テ諸政ヲ總ヘシム、是ヨリ先キ敕シテ七卿及ヒ毛利氏ノ官爵ヲ復ス、長藩ノ兵東上シテ京師ニ入ル、

慶喜及ヒ會津桑名ノ兩藩等之ニ不平ナリ、依リテ二條城ニ入り事ヲ議ス、薩長以下ノ諸藩、關ヲ守ル、既ニメ慶喜、會津桑名兩藩ノ兵ヲ率テ俄カニ大阪ニ下ル、朝廷其舉動ヲ怪ミ、兩藩ノ兵京師ニ入ルヲ禁ジ、徳川慶勝、松平慶永ヲ大阪ニ遣リ、慶喜ニ諭シテ入京シ、議定職ヲ奉セシム、慶喜肯ヲ奉ス、○明治元年正月、慶喜、會津桑名兩藩ノ兵ヲ先鋒トナシ、兵ヲ率テ京師ニ入ラントス、朝廷乃チ薩長兩藩ニ命シ之ヲ伏見、鳥羽ニ防カシム、既ニシテ兩軍交戦シ、慶喜ノ兵大ニ敗レ、大坂ニ

ニ走り、遂ニ海路ヨリ江戸ニ歸ル、是ニ於テ詔シテ慶喜以下ノ官爵ヲ削リ、有栖川熾仁親王ヲ以テ大總督トナシ、西郷隆盛等ヲ參謀トナシ、以テ之ヲ討シム、岩倉具定等先鋒トナリ、東山、東海、北陸ノ三道ヨリ並ビ進ム、○三月、各國公使始メテ天皇ニ謁ス、是月ニ二條城ヲ以テ太政官代トナシ、天皇茲ニ親臨シ、乃チ公卿諸侯ト誓テ曰ク、廣ク會議ヲ起シ、萬機公論ニ決スベシ、曰ク、上下心ヲ一ニシ、盛ニ經綸ヲ行フベシ、曰ク、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ、曰ク、知識ヲ世界ニ

求メ大ニ皇基ヲ振起スベシト時ニ參與大久保利通上書シテ都ヲ大阪ニ遷シ以テ天下ノ耳目ヲ新ニセントテ請フ、後チ都ヲ江戸ニ遷スハ蓋シ此議ニ基クト云フ、○征討ノ官軍道ヲ分テ江戸ニ向フ、徳川氏ノ臣屬防守ノ策ヲ議ス、然レモ慶喜恭順ヲ主トシ群議ヲ斥ケテ用中ズ、特ニ勝安房、大久保一翁ニ旨ヲ傳ヘテ臣屬ノ暴動ヲ禁シ官軍ニ抗スルナカラシム、既ニノ海道官軍ノ先鋒品川ニ至ル、勝安房乃チ西郷隆盛ヲ見テ慶喜恭順ノ狀ヲ陳シ江戸ノ攻撃ヲ止メントテ請フ、

隆盛之ヲ大總督ニ啓ス、是ニ於テ大總督江戸攻撃ノ令ヲ止ム、山道ノ官軍甲斐ニ至リ賊將近藤勇等ノ扼スル所トナル、討テ之ヲ破リ遂ニ江戸ニ入ル、○四月、敕使江戸ニ入り詔ヲ宣ス、曰ク、江戸城及ヒ軍艦銃砲ヲ獻スベシ、曰ク、慶喜ノ逆ヲ助クルモノ死一等ヲ減シテ論スベシ、曰ク、慶喜ハ水戸ニ退テ謹慎スベシト、慶喜命ヲ奉ス、既ニシテ水戸ニ退ク、○是ヨリ先キ、松平容保其國ニ退キ桑名以下ノ諸藩主相率テ東北ニ走リ、徳川氏ノ臣屬モ亦各所ニ脱走ス、時ニ官軍下野ノ宇都宮